

山口県教育財団埋蔵文化財調査報告 第3集

とう ぜん じ くろ やま
東禅寺・黒山遺跡II

— 平成8年度南若川治水緑地建設事業に伴う発掘調査報告 —

1997

財団法人 山口県教育財団



坩 埚

序

本書は、山口県山口土木建築事務所の委託を受けて、財団法人山口県教育財団が実施した南若川治水緑地建設事業に係る東禅寺・黒山遺跡の2年次の発掘調査の記録です。

私たちにとって先人が残した文化財は、ふるさとの歴史を理解する上で、大変貴重な財産です。この文化や伝統を継承することは、21世紀に向けて活力と潤いに満ちた創造をするために欠くことのできないものです。これらの文化財を損なうことなく未来へ伝えていくことは、今、私たちに与えられた課題であるといえます。

遺跡の保護については、埋蔵文化財保護の立場から基本的には現状保存が望ましいものでありますが、やむを得ず消失することになった地域については、発掘調査を実施し、記録保存を行うこととしております。

このたびも、南若川治水緑地建設事業に先立ち関係諸機関と協議・調整を重ねて参りましたが、当事業によって失われる範囲について発掘調査を実施いたしました。

調査の結果、古代から中世にかけての集落跡が発見されました。特に、緑釉陶器や三叉トチンなどの廃棄された土坑や埧塙の出土した柱穴、あるいは、フイゴの羽口の出土などは、近くの周防鑄銭司跡との関連が考えられ、注目されるものです。これらの資料は当時の人々の暮らしを考える上できわめて貴重で、ふるさとの歴史に新しい事実を加えるものです。

本書はその調査成果をまとめたものであり、収録された資料が、教育・学術・文化の振興のために広く活用されることを願っています。

終わりに、調査の実施にあたって御協力いただいた関係各位に対し、厚くお礼申し上げます。

平成9年3月

財団法人山口県教育財団

理事長 上野 孝明

例 言

1. 本書は、財団法人山口県教育財団が、平成8年度に実施した東禅寺・黒山遺跡（山口県山口市大字鑄銭司字大円）の発掘調査概要報告書である。
2. 調査は、財団法人山口県教育財団が山口県山口土木建築事務所の委託を受けて実施したものである。
3. 調査組織は次のとおりである。

調査主体 財団法人山口県教育財団

調査担当 財団法人山口県教育財団事務局指導主事 大石 学

山本義信

4. 調査及び本書の作成にあたっては、山口県埋蔵文化財センター職員の助言・協力を得た。
5. 調査にあたっては、山口県山口土木建築事務所、山口市教育委員会並びに地元関係各位から協力・援助を得た。
6. 本書の第1図は、国土地理院発行2万5千分の1地形図「小郡」「台道」を使用した。第2図は山口県山口土木建築事務所提供のものである。
7. 本書に使用した方位は、国土座標（第3座標系）で示し、標高は海拔標高である。
8. 出土遺物のうち石製品の石質鑑定は、山口県立山口博物館専門研究員 亀谷 敦 氏に依頼した。なお石質鑑定は表面観察によるものである。
9. 本書に使用した土色の色調の表記は Munsell 方式による。

農林省農林水産技術会議事務局（監修）「新版標準土色帳」

10. 図版中の遺物番号は、実測図の遺物番号と対応する。
11. 土器実測図について、断面黒塗は須恵器、網掛けは磁器、白塗は土師器・土師質土器・瓦質土器を表す。また、外内面の濃い網掛けは黒色土器を、薄い網掛けは緑釉陶器を表す。
12. 本書で使用した遺構略号は次のとおりである。

SB：掘立柱建物跡 SK：土坑 SP：柱穴 SD：溝・溝状遺構

13. 本書の作成・執筆は、大石・山本が分担作成し、山本が編集した。

目 次

I	遺跡の位置と環境	1
II	調査の経緯と概要	3
III	遺 構	9
	(1) 掘立柱建物跡	
	(2) 土坑	
	(3) 溝・溝状遺構	
IV	遺 物	14
V	ま と め	20

挿 図 目 次

第1図	遺跡の位置と周辺の遺跡……………	1	第10図	S K08出土遺物実測図……………	14
第2図	調査区設定図……………	4	第11図	S K07出土遺物実測図……………	15
第3図	第Ⅳ地区遺構配置図……………	5・6	第12図	S K20出土遺物実測図……………	15
第4図	第Ⅲ地区遺構配置図……………	7・8	第13図	S K11出土遺物実測図……………	16
第5図	S B16・06実測図……………	9	第14図	S K・S D出土遺物実測図……………	16
第6図	S B05実測図……………	10	第15図	S P出土遺物実測図①……………	17
第7図	S B03・04実測図……………	11	第16図	S P出土遺物実測図②……………	18
第8図	S K08・07・02・03・04・20実測図……………	12	第17図	包含層出土遺物実測図……………	19
第9図	S K11・32・34実測図……………	13	第18図	出土石器実測図……………	19

図 版 目 次

巻頭図版 埴塙（S P54出土）

図版1	東から東禅寺・黒山遺跡を望む 調査区全景
図版2	第Ⅳ地区北西区（南から） 第Ⅲ地区中央部（南から）
図版3	S K08土器出土状況①②③ 銭出土状況 完掘
図版4	S K07土器出土状況①②③ 石出土状況 完掘
図版5	S K02・04・20・11土器出土状況 S K03完掘 S K32土器・石製品出土状況 S K34土層断面 S K34完掘
図版6	S P55・79・72・75・37・05土器出土状況 S P54埴塙出土状況 S D01緑釉陶器出土状況
図版7	S K08出土遺物 S K07出土遺物 S K20出土遺物
図版8	S K11出土遺物 S K出土遺物
図版9	S P出土遺物①
図版10	S P出土遺物②
図版11	S P出土遺物③ 包含層出土遺物 出土石器・銭

表 目 次

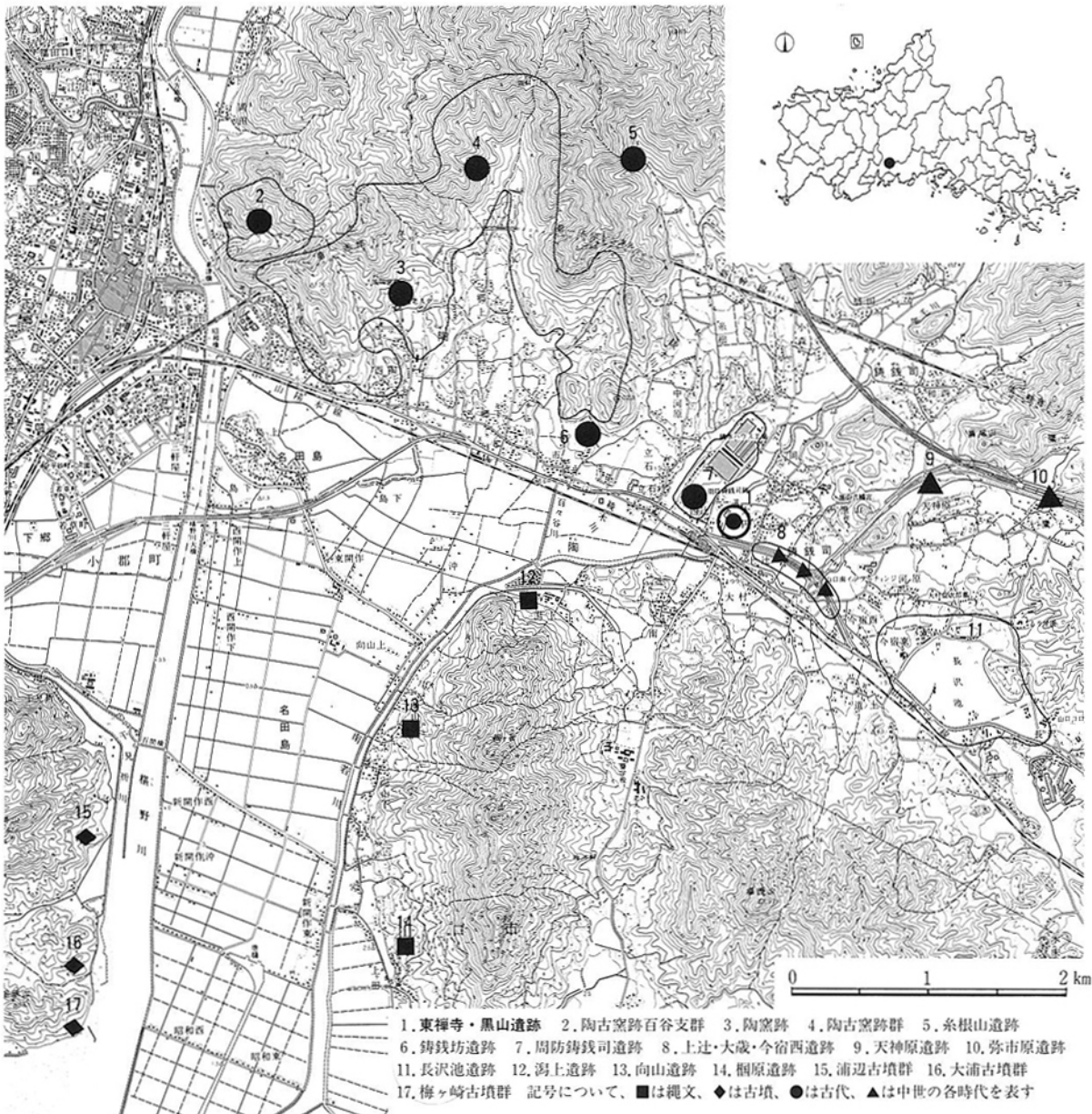
第1表	掘立柱建物一覧表……………	7・8
第2表	土坑一覧表……………	7・8

I 遺跡の位置と環境

山口市大字鑄銭司に位置する東禅寺・黒山遺跡は、古代から中世にかけての集落跡である。

遺跡のある山口市鑄銭司地区は、北は黒河内山（424.4m）を最高峰に標高300～400mの山口山地、南は火の山を中心に標高200～300mの秋穂山地、東は谷中分水帯を境に防府市大道地区と接する。そして南西部は、広大な干拓地名田島地区が広がっている。

平成2（1990）年の国勢調査による産業人口の構成をみると、鑄銭司地区の就業人口1,712人の内、農業人口は、958人（約60%）を占める。また、同年の農業センサスによれば、耕地面積は329haであり、その耕地の約92.7%が水田という典型的な稲作農村である。このことは、農耕地の開発に適した台地や低地の占める割合が高く、耕地に恵まれた地域であることを示している。しかし、低地や台地の大半が水田化されているとはいえ、決して水利に恵まれた環境とはいえない。遺跡の北部山口山地を水源とする高橋川、金毛川、綾木川などは、いずれも小河川で流路が短く、灌漑に十分な水量をもたないこと、それを補う水田灌漑用の溜池が多く依存度が高いのも鑄銭司地区の特徴である。



第1図 遺跡の位置と周辺の遺跡

本遺跡の周辺で最初に生活の痕跡が伺えるのは長沢池遺跡である。旧石器時代の石器や縄文土器弥生土器が発見されており、先史時代すでに生活の場があったことが分かる。しかし、本遺跡周辺において弥生や古墳時代の足跡は認めにくく資料は乏しい。特に古墳時代の遺跡は見つかっていない。このことは、平地や低地で水耕を営んだ弥生や古墳時代の人々にとって、水耕に適した可耕地がありながら灌漑用水の確保が困難であったため集落は営まれなかったことを示唆している。

本遺跡のある鑄銭司地区が再び生活の場として登場するのは、律令制度の確立した古代である。古代について本遺跡の周辺の環境を考察する時、奈良時代の陶窯跡、平安時代の周防鑄銭司遺跡そして山陽大路（古代の山陽路）について記す必要がある。

陶窯跡は、須恵器生産のため陶地区向田の丘陵南斜面（標高約80m）に造られたものである。さらに、陶地区北部山麓にも19の窯跡が確認されており陶古窯跡群を形成している。このことは須恵器の製造にたずさわる陶部と呼ばれる技術者集団がいたこと、同地区から防府市大道地区一帯が良質な陶土の産出地であること、燃料としての豊かな森林資源を有したこと、窯業に適した瀬戸内の気候風土等を背景に、周防国府や周防鑄銭司などへの供給を主目的として成立したものとみられる。

さらに本遺跡の西側、金毛川を挟んだ対岸にある周防鑄銭司遺跡については、昭和41年、学術調査が実施され倉庫群等の遺構、フイゴの羽口、^{るつぽ}埴塙等の遺物が検出された。文献によると、周防鑄銭司の開設は天長2（825）年のこととされ、その後11世紀初頭まで約200年間貨幣が鑄造された。そして律令体制の衰退と共に、鑄銭事業は終焉を迎える。鑄銭司設立に大きな影響をおよぼし200年もの長きにわたり鑄銭事業が営まれたことは、近くに周防国府があり、密接な係わりがあったからに他ならない。さらに当時の海岸線は四辻あたりまで湾入しており、遺跡の周辺の海が銅の鉱石や銅銭の輸送等の条件を満たしていたことも大きな要因としてあげられる。

古代における主要幹線山陽大路は、都から太宰府を結ぶ幹線道路であり本遺跡の南側を通っていたと推測される。今の四辻付近には官駅八千^{ちのうまや}駅家がおかれ、古代工業地帯を立地させる交通の要衝であった。つまり本遺跡の周辺に位置する古代の遺跡の多くは、律令国家の計画によって成立した工業集落としての性格が強いものと推定される。

中世、そして近世になると治水土木技術が進歩し、多数の灌漑用溜池が築堤された。特に、慶安4（1651）年築堤の長沢池の水は、当鑄銭司地区や干拓地の灌漑にあてられた。享保13（1728）年に作成された「地下上申絵図」によれば遺跡一帯は、「水田と化し、集落は台地や山陽道沿線に集中する」と記されている。これは、長州藩の三白政策に伴う可耕地の拡大に起因し、以降鑄銭司地区の水田面積は広がった。「防長風土注進案」には、遺跡周辺は干潟も広がっていたことも記されている。その干潟も次第に干拓され、周囲に散在する溜池の水をもちいて水田が開かれた。そのため付近の景観は大きく変化し、干潟に面した鑄銭司地区もやや内陸に位置する街道沿いの純農村地帯に変貌した。

参考文献	山口市教育委員会	『周防鑄銭司』	1978	高田印刷
	山口市史編纂委員会	『山口市史各説篇』	1971	大村印刷
	山口企画財政部	『平成5年山口市統計年報』		森重印刷
	山口県文書館編集	『防長風土注進案14小郡宰判』		大村印刷

II 調査の経緯と概要

東禅寺・黒山遺跡の位置する鑄銭司地区は、金毛川、高橋川などの小河川が南若川に合流する地域であり、また、7～8 mと標高が低いため、度々大雨による洪水にみまわれ、人々は被害を被ってきた。そこで、県はこの水害の対処のため、遊水池を建設する南若川治水緑地建設事業を計画した。

鑄銭司地区には、国指定史跡「周防鑄銭司」を始め、多くの遺跡が確認されているため、治水緑地建設予定区域にも遺跡の埋存する可能性が予想された。そこで、山口県山口土木建築事務所から調査依頼を受けた山口県教育委員会は、平成6年、計画地区内の予備調査を行った。その結果、土坑や柱穴などの遺構や、土師器・磁器などの遺物が検出されたため、事前の発掘調査を実施することとなった。対象面積が18,000㎡と広大なため、継続調査とし、財団法人山口県教育財団が山口県山口土木建築事務所から受託し実施することとなった。

調査初年である昨年度は、工事区域北東部を調査対象地とし、発掘調査を実施した。調査面積は約3,500㎡で、平安時代から近世にかけての集落跡が確認された。本年度は、工事区域の中央部、面積約2,000㎡を調査範囲とし、発掘調査が行われることとなった(第2図)。昨年度からの継続であるため、中央の畦畔を境に東側を第Ⅲ地区、西側を第Ⅳ地区とした。調査対象地区の現況は水田であるが、昨年度と同様、調査後再び元に戻すことを前提としたため、各水田の畦畔及び水路は残し、作付け範囲のみを調査することとした。さらに、調査対象地区の周囲の水田は本年も作付けを行うこともあり、東側に隣接する休耕田を借り受け、排土場にするとともに、取り付け道を設置することとした。

平成8年6月11日、現地における地権者等関係諸機関の打ち合わせを行った後、6月12日から発掘調査を開始した。まずはじめに、地層及び遺構の分布を詳細に把握するため、事前調査(平成6年度予備調査)の資料をもとに対象地区に8本のトレンチを設定し人力で掘り下げた。この結果、調査区全域にわたり遺構が認められた。基本的な層序は、耕作土→盤土→黄褐色土の地山で、この地山を掘り込む状態で遺構が検出された。また、第Ⅳ地区の南西隅では、約500㎡にわたり、盤土と地山の間に遺物包含層が広がり、その上面から遺構が掘り込まれているため、この区域については重機による除去作業をこの面で止めることとした。

7月2日、重機による表土除去が開始された。梅雨は明けたというものの、今年度の調査もまた水との戦いを強いられることとなった。周囲の水田から流れ込む水とともに、遺構面が用水路の水位よりも低いこともあって、調査区は常に水に浸っている状態であった。表土除去を行う重機も水に融けた泥を運ぶという状況であり、作業は難航した。その後の人力による遺構検出もまた、削った土を運



中学生体験学習



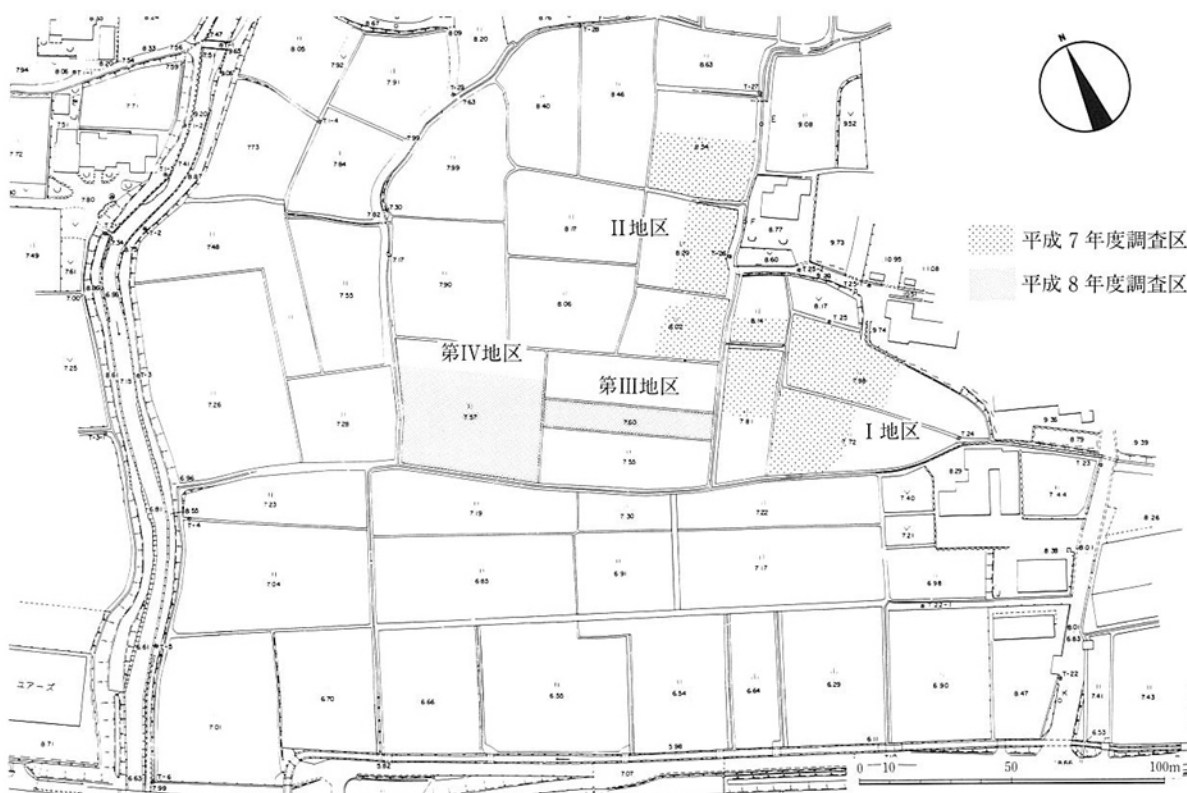
台風6号通過

ぶのにも足場が悪いために苦労の連続であった。そのため、調査区の周囲に溝を巡らせ、最も標高の低い第Ⅳ地区の南西隅から水中ポンプを使い日夜排水することで、辛うじて遺構面を乾いた状態に保つことができ、検出作業を続けた。その結果、第Ⅳ地区の西側には大型の掘方を持つ柱穴を含んだ多数の柱穴群や土坑・溝などが、また、第Ⅲ地区においても柱穴のほか土坑などが確認された。遺構検出後、調査区全域の平板測量を行い、遺構配置図を作成、次からの遺構掘り込みに備えた。

7月22日、掘り込みを開始した。まず、第Ⅳ地区南西部の包含層の部分から始めたが、地表は乾いていても掘り込むにつれて水が湧いてくるという状況のためやはり作業は難航した。この作業を終えた後、包含層を除去し、第Ⅳ地区全体の掘り込み、さらに第Ⅲ地区の掘り込みと作業を続けた。作業中、いくつかの遺構から緑釉陶器の破片が出土し、S K08・07からは緑釉陶器の欠片とともに先端に緑釉の付着したトチンも出土した。さらに、掘立柱建物を構成する柱穴からは、完形の埴塙も出土し、金毛川を挟んだすぐ西側の周防鑄銭司との関わりも考えられるようになり、作業にも熱がこもってきた。また、8月2日・9日の両日は、阿東中学校の生徒10名が発掘に参加し、作業員と一緒に作業にあたった。自分の孫と同年代の中学生の手を取りながら掘り込みの手順を教える作業員の顔にも笑みがこぼれ微笑ましい光景であった。掘り込みの完了したそれぞれの遺構は、随時、写真撮影を行い実測を進めていった。

8月24日、発掘調査の成果を地元の人々に知らせるため現地説明会を開催した。たくさんの熱心な見学者の参加を得て、当時の人々の生活の一端を垣間見てもらうことができた。

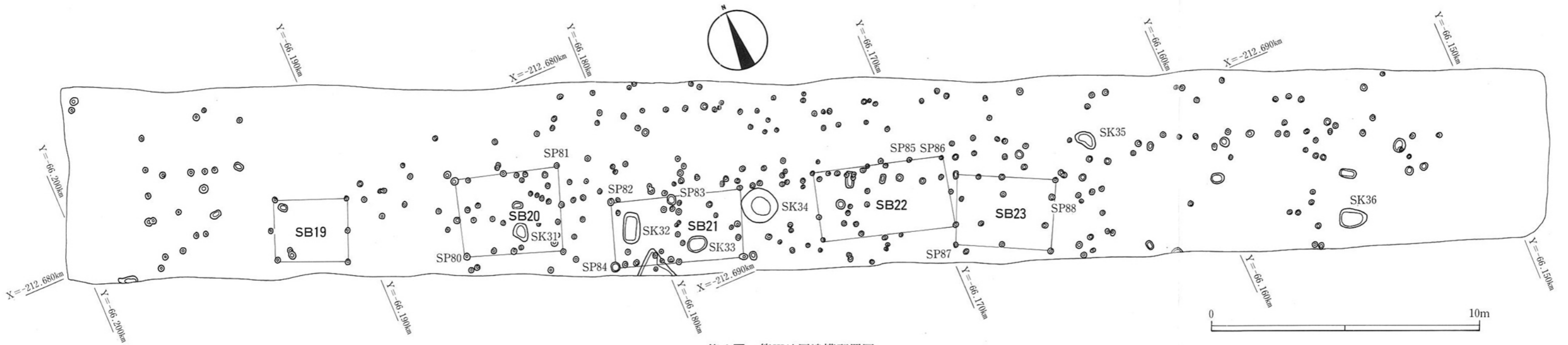
8月29日、遺跡全域の空中写真を撮影し、8月30日、およそ2ヶ月半に及ぶ現地におけるすべての調査を終了した。その後、県埋蔵文化財センターにおいて、調査資料を整理し、出土遺物の復元・実測を実施して、この報告書を刊行した。



第2図 調査区設定図



第3図 第IV地区遺構配置図



第4図 第III地区遺構配置図

第1表 掘立柱建物一覧表

規模 (間)	建物 番号	棟方向 4	柱 間		出土遺物	時代	備 考
			桁 行	梁 行			
			建物の南西隅から (m)	建物の南西隅から (m)			
2 × 1	02	—	2.4・2.1	2.6	土師器鍋片・椀、須恵器片		柱間不整
	18	/	3.0・2.8	3.0	須恵器甕片、土師器鍋片		
	19	—	2.5	1.2・1.2	なし		
	21	—	2.4・2.4	2.4	土師器片、須恵器片		
	23	—	1.7・1.9	2.5	土師器椀片、土師器皿		柱間不整
2 × 2	06	—	3.0・2.7	2.0・2.3	埴塼、須恵器杯、土師器椀	古代	
	09	/	1.6・1.2	0.9・1.4	瓦質鍋片、白磁片、土師器片	中世	柱間不整
	12	—	1.9・1.8	1.0・1.4	土師器杯、土師器皿片		柱間不整
	15	—	2.4・3.3	1.7・1.7	土師器杯片		柱間不整
	20	—	1.7・1.9	1.4・1.5	瓦質鍋片、土師器片、磁器片	中世	柱間不整
	22	—	2.9・2.1	0.9・1.7	土師器椀		
3 × 1	01	—	2.4・2.4・2.4	—	土師器台付皿、土師器皿		北、東にのびる可能性有り
	08	—	1.5・1.7・1.8	2.4	土師器皿		
	10	—	1.6・1.3・1.4	2.1	土師器杯・皿、足鍋脚部		
3 × 2	03	—	2.7・2.7・2.4	2.1・2.2	瓦質鍋片、土師器片、トチン	中世	
	07	—	1.4・1.3・1.2	1.4・1.2	土師器片、瓦質鍋片、白磁片	中世	柱間不整
	11	—	2.3・2.0・1.8	1.8・1.2	土師器杯、足鍋片、白磁片		柱間不整
	13	—	2.4・2.3・2.4	2.4・2.4	土師器甕片、黒色土器片	古代	北側は5本柱
	16	/	2.1・2.2・2.2	2.1・2.1	土師器椀・皿、白磁椀	古代	柱間整然
	17	—	2.4・2.4・2.4	1.9・1.9	瓦質鍋、須恵器片、土師器片	中世	西側、南側に溝有り
4 × 2	14	/	2.1・2.0・2.1・1.9	1.9・2.0	土師器片、黒色土器、白磁片		北側に庇の可能性有り
4 × 4	05	—	2.6・2.4・2.4・2.4	1.6・2.2・2.1・1.5	須恵器杯、土師器椀・鍋片	古代	側柱欠失
5 × 2	04	/	1.6・2.1・2.1・2.1・2.7	2.0・1.6	有孔台付皿、瓦質鍋片、足鍋	中世	柱間不整

第2表 土坑一覧表

土坑 番号	平面形	規 模			出土遺物	時代	備 考
		長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)			
02	隅丸長方形	150	70	10	土師器椀・杯・甕	古代	
03	不整長円形	95	80	30	土師器片、須恵器片、白磁片	古代	焼土塊
04	隅丸長方形	110	100	10	須恵器杯、土師器椀、スラグ	古代	
06	長円形	95	55	16	土師器片、須恵器片		柱穴に切られる
07	長円形	140	65	25	緑釉陶器、土師器椀、トチン、羽口	古代	
08	長円形	205	70	15	緑釉陶器、台付皿、トチン、銭	古代	
10	長円形	115	75	5	須恵器片、土師器片		
11	長円形	65	45	13	瓦質鍋、土師皿・杯、刀子	中世	
13	不整長円形	(100)	75	17	瓦質鍋片、土師器杯・椀片	中世	SK14に切られる
14	長円形	105	65	24	瓦質鍋片、須恵器片、土師器片	中世	柱穴を切る
15	隅丸長方形	75	53	10	瓦質鍋片、土師器鍋・杯・皿片	中世	SK16に切られる
16	隅丸長方形	65	55	13	瓦質鍋片、須恵器片、白磁片	中世	
18	長円形	(150)	90	19	土師器皿、瓦質鍋片、須恵器片	中世	
19	長円形	52	39	17	土師器杯	中世	SD03を切る
20	長円形	81	65	11	須恵器杯、フイゴ羽口	古代	
23	長円形	520	155	10	土師器杯・椀・甕片、黒色土器片	古代	溝の可能性
25	長円形	130	100	17	須恵器片、土師器椀・杯・皿片	古代	
27	長円形	105	70	15	土師器椀	古代	柱穴に切られる
28	隅丸長方形	60	45	15	須恵器片、土師器片	古代	
29	長円形	190	145	35	土師器杯、須恵器甕片、土師器片	古代	焼土塊を含む
30	長円形	75	50	23	焼土塊	古代	SD09に切られる
32	隅丸長方形	125	55	15	土師器椀	古代	墓の可能性有り
34	円形	140	—	135	瓦質鍋片	中世	井戸の可能性

III 遺 構

今回の発掘調査で発見された遺構は、掘立柱建物跡23棟、土坑36基、溝・溝状遺構18条、柱穴約1,200個である。遺構は調査区全域に広がっているが、溝・溝状遺構は全て第IV地区から検出された。また、第IV地区西側には大型の堀方を持つ柱穴を含め、柱穴や土坑が集中している。なお、各遺構の上面は、後世の水田開発により削平を受けており、遺存状況は全般的によくない。

(1) 掘立柱建物跡

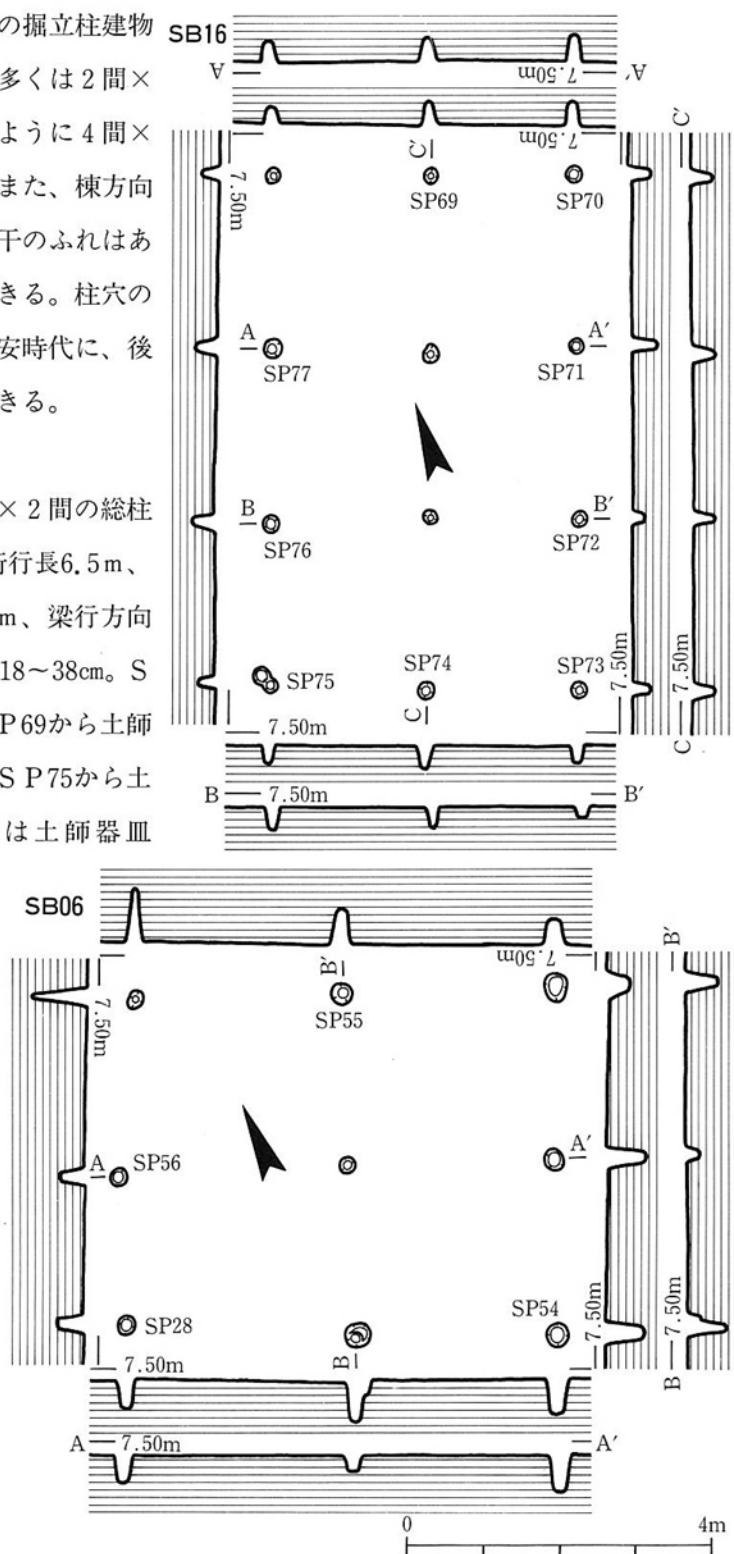
第IV地区では18棟、第III地区では5棟の掘立柱建物が復元できた(第3・4図 第1表)。その多くは2間×2間、3間×2間の規模であるが、後述のように4間×4間、5間×2間の大型の建物もある。また、棟方向をみると、現在の畦畔に沿うものと、若干のふれはあるがほぼ東西方向を向くものとに大別できる。柱穴の埋土、配置、出土遺物などから前者は平安時代に、後者はその多くを中世に比定することができる。

SB16・06 (第5図)

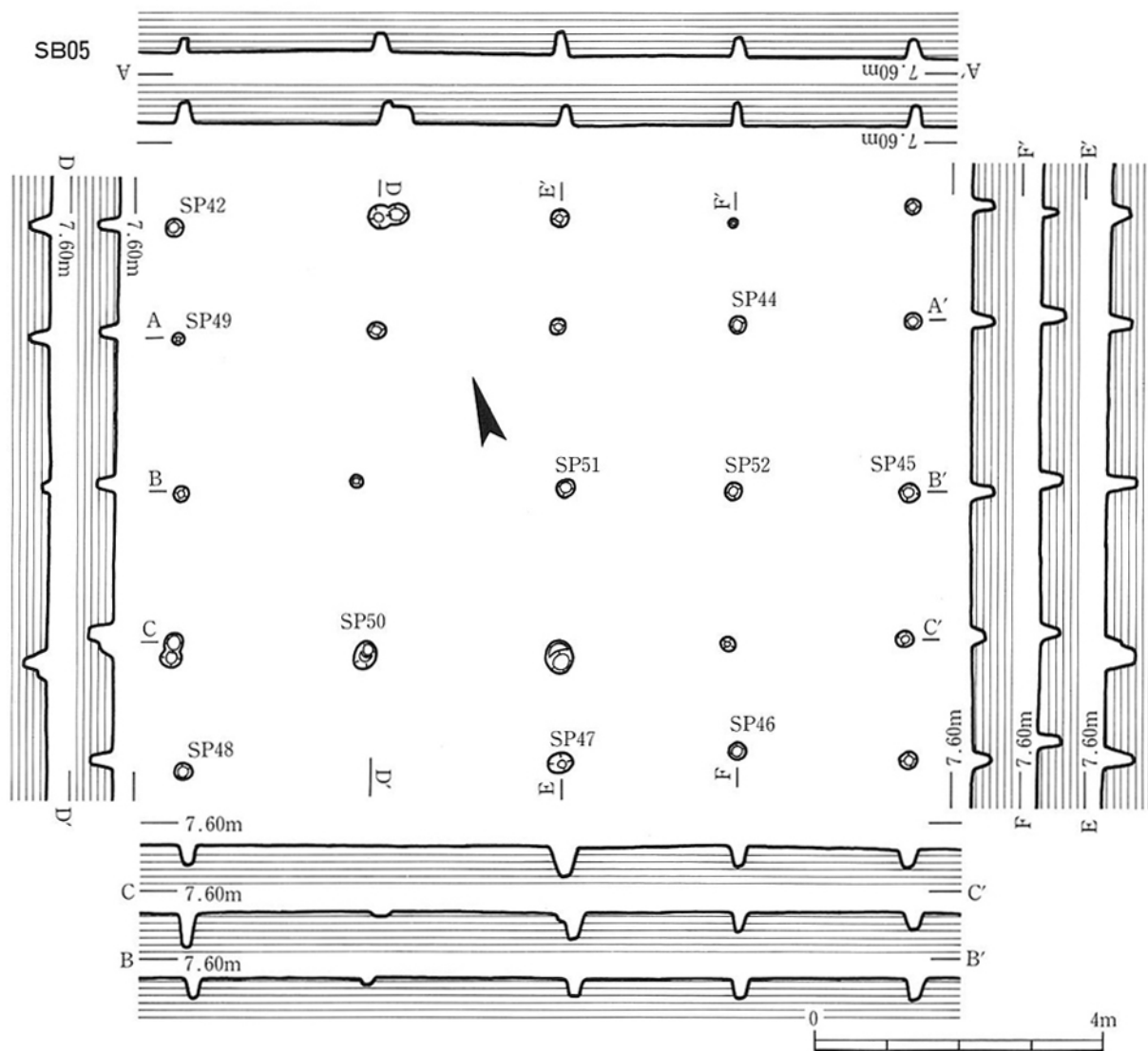
SB16は第IV地区東側に位置する3間×2間の総柱の建物と考えられる。棟方向はN20°E、桁行長6.5m、梁行長4.2m。柱間の平均は桁行方向2.2m、梁行方向2.1m。柱穴の規模は直径16~22cm、深さ18~38cm。SP71・73・74・76・77から土師器片、SP69から土師器椀(78・79)、SP72から白磁(76)、SP75から土師器椀(77)が出土。またSP70からは土師器皿(70~73)、土師器椀(74・75)が重なって出土した(図版6)。

SB06は第IV地区中央やや北寄りに位置する桁行長5.7m、梁行長4.3mの2間×2間の総柱建物である。棟方向はN66°W。柱穴の規模は直径30~40cm、深さ40~50cm。SP55から須恵器杯(90)、SP56から土師器鍋、SP28から土師器皿(88)、SP54から須恵器杯(89)、埴塙(91)が出土。埴塙はほぼ完形で、柱穴の底に伏せられた形で納められていた(図版6)。

この両建物は平安時代のものと推定される。



第5図 SB16・06実測図



第6図 SB05実測図

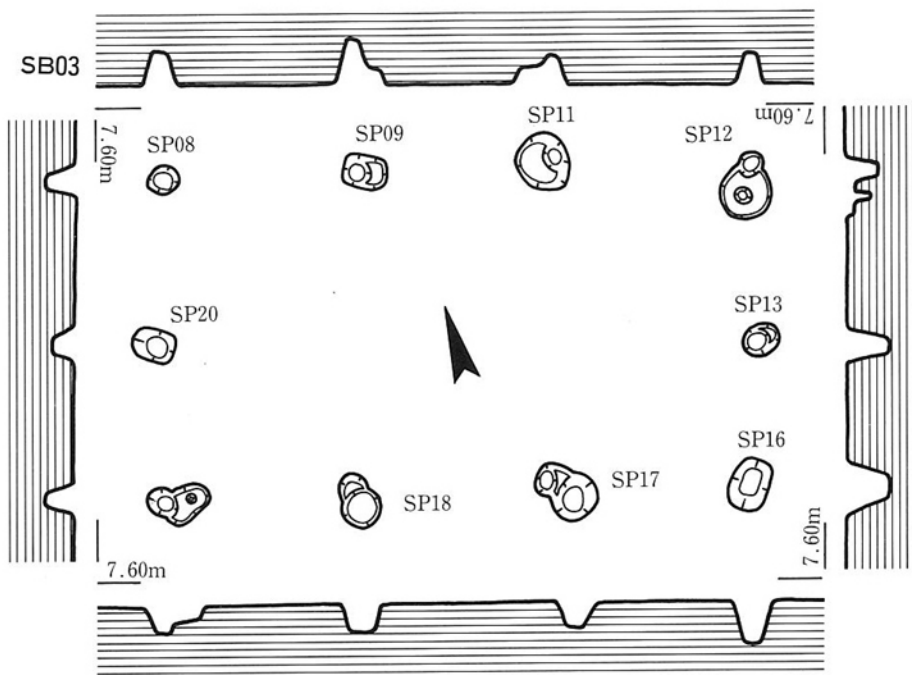
SB05 (第6図)

SB06の南側に一部重なる形で検出された4間×4間の建物。南側の柱列の一部は土坑により切られているため確認できなかったが、総柱と考えられる。棟方向N72°W、桁行長9.8m、梁行長7.4m。桁行方向の柱間は平均2.4mでほぼ一定であるが、梁行方向は1.6・2.2・2.1・1.5mであり外側の柱間が狭い。柱穴の規模は平均値で直径20cm、深さ30cm。柱穴内からは、SP49から土師器鍋片、SP50から土師器碗片・皿、SP52から須恵器杯片・土師器碗片、SP42・44・45・46・47・48・51から土師器片・須恵器片が出土。これらの遺物から平安時代の建物と推定できる。

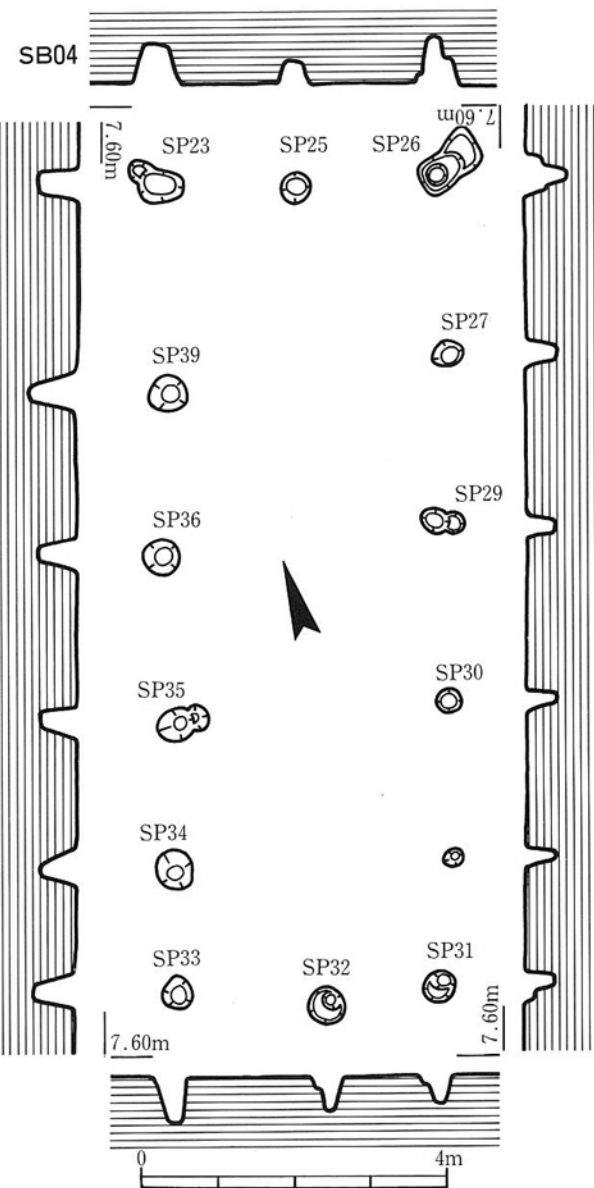
SB03・04 (第7図)

第IV地区西側に位置するこの2棟の掘立柱建物は、それぞれの棟方向をほぼ直角にふり、約1mの間隔を置いて並ぶ。柱穴の掘方も比較的規模が大きく、深い。同時期に建てられていた可能性がある。

SB03は、棟方向N73°Wの3間×2間の建物。桁行長8.1m、梁行長4.3m。柱穴の規模は、平均値で直径50cm、深さは最大60cm。SP13から砥石(148)・瓦質土器鍋、SP16から瓦質土器鍋(129)・土師器鍋(130)・土師器甕(128)の他、SP08・09・11・12・17・18・20から瓦質土器鍋片・土師器片・須恵器片が出土。



S B04は、棟方向N
17° Eの5間×2間の
建物。桁行長10.6m、
梁行長3.6m。柱穴規模
は直径20~30cm、深さ
は平均45cm。S P29か
ら有孔台付皿(86・
87)・瓦質土器鍋・土師
器鍋、S P23・35から
足鍋片、S P30から白
磁片、S P27・31・33・
34・36から瓦質土器鍋
片・土師器片、S P25・



26・32・39から土師器片が出土。

S B03・04とも中世に比定できる。

(2) 土坑

今回の調査では第IV地区から30基、第III地区から6基、計36基の土坑が検出された。出土遺物、埋土から平安時代中頃から中世のものと比定できる(第2表)。中でもS K08・07からは緑釉陶器片および端部に緑釉の付着した三叉トチンが数多く出土しており注目される。

S K08・07 (第8図 図版3・4)

両土坑は、第IV地区の西側に、長軸の方向はやや異なるが南北に並んで位置する。出土遺物から平安時代中頃から後期と推定できる。

S K08は長軸205cm、短軸70cmの長円形の平面をもつ。深さ10cmであるが、南側の一部はさらに15cmほど掘り窪められている。埋土は黒褐色土の単層であり、埋土中には多量の土師器片や黒色土器(8)・須恵器片を含み、遺構検出の段階から多数出土した。特に個体数の多いものは土師器碗の高台部であり、破損したものを廃棄した様子がうかがえる。また、緑釉陶器(9)、及び三叉トチン(12~17)、埴塙(11)も併せて出土。最深部からは銅銭(「延喜通宝」)が出土(150 図版11)。

第7図 S B03・04実測図

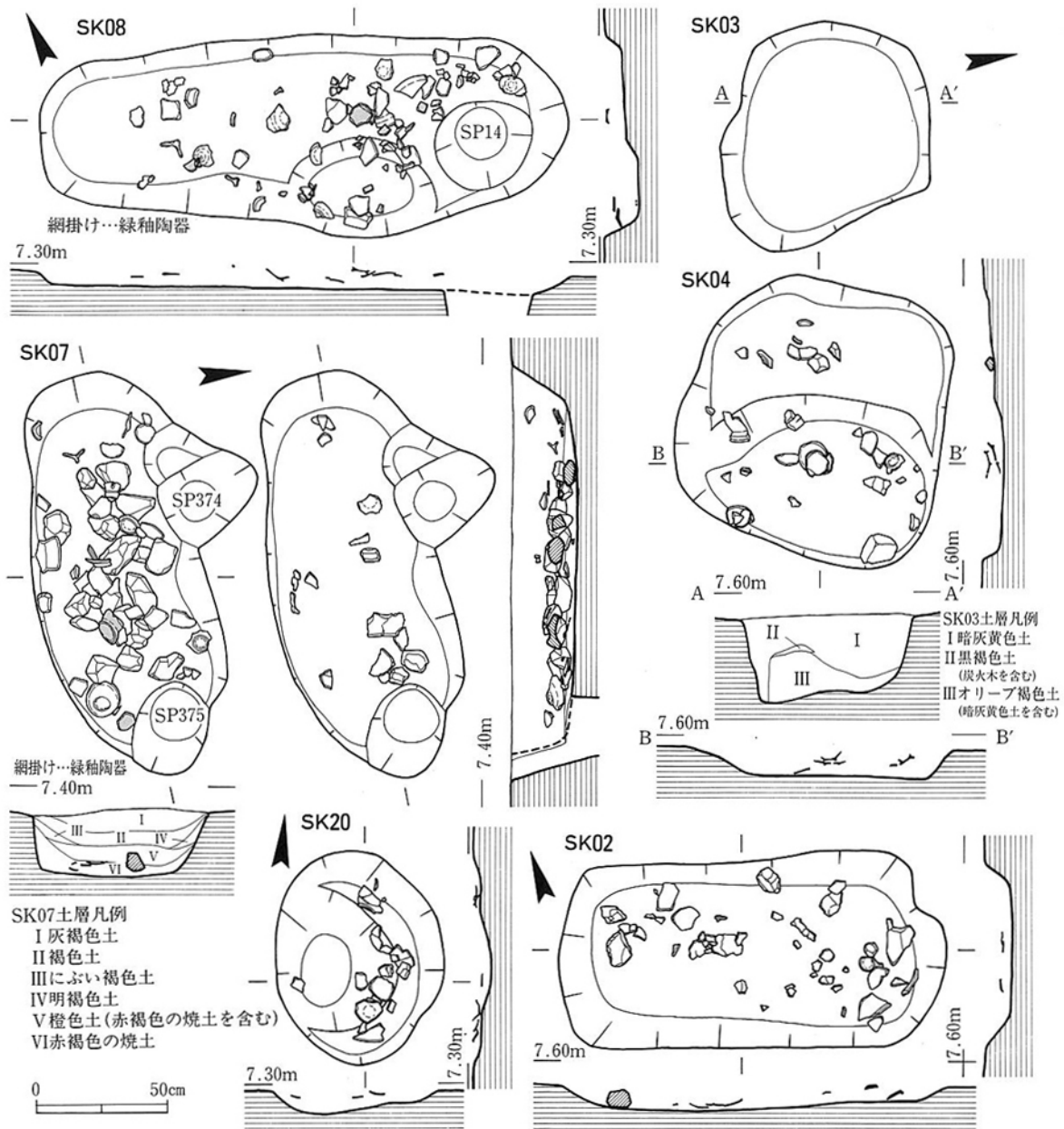
SK07の平面形は、北側と東側をそれぞれ後代の柱穴によって切られるが、長軸140cm、短軸65cmの長円形。遺構面からの深さは25cmを測る。底は平坦で厚さ5~8cmの赤褐色の焼土が広がる(第VI層)。その上層の第V層からは多数の石とともに緑釉陶器(22・23)、三叉トチン(24・25)をはじめ土師器片、須恵器片が多数出土。また、第VI層中からフイゴ羽口(26・27)、土師器甕(28・29)、須恵器甕片も出土。

SK03・04 (第8図 図版5)

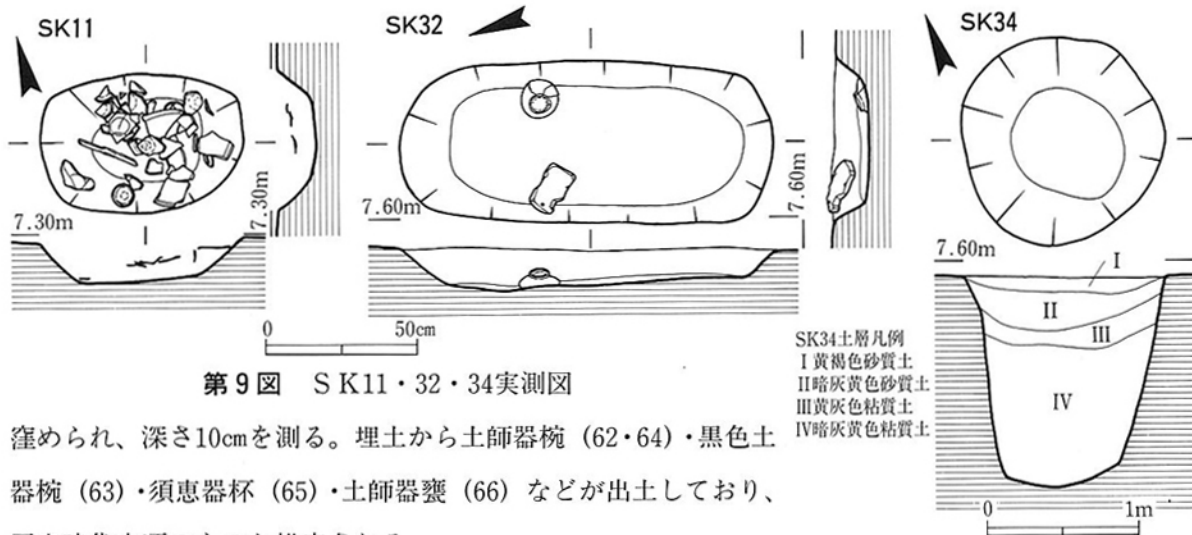
この二つの土坑は第IV地区の北西部に近接して位置する。

SK03は、長軸95cm、短軸80cmの不整長円形の平面形を持ち、深さ30cmを測る。埋土は大きく2層に分かれ、その間に炭化木材を含む黒褐色土を挟む。埋土中から土師器片、須恵器片、黒色土器片、白磁片などが出土。また焼土塊も含まれていた。

SK04は、長軸110cm、短軸100cmの隅丸長方形を呈する土坑。西半部に比べ、東半部はさらに掘り



第8図 SK08・07・02・03・04・20実測図



第9図 SK11・32・34実測図

窪められ、深さ10cmを測る。埋土から土師器椀(62・64)・黒色土器椀(63)・須恵器杯(65)・土師器甕(66)などが出土しており、平安時代中頃のものとして推定される。

SK02・20 (第8図 図版5)

SK02は第IV地区の北西部に位置する隅丸長方形の土坑。長軸150cm、短軸70cm、深さ10cmを測る。遺物は土師器椀(53)、甕(67)をはじめ多数の土師器片が石とともに廃棄された形で出土。暗褐色の埋土に焼土塊を含む。

SK20は第IV地区の中央やや南よりに位置する小土坑。平面形は、長軸80cm、短軸65cmの長円形、中段を有するが、最深部12cm。遺物は中段の部分から須恵器杯(30~33)、フイゴ羽口(34)の他土師器甕片が出土。

SK11・32・34 (第9図 図版5)

SK11は第IV地区西側に位置する長軸65cm、短軸45cmの長円形の平面形をもつ小土坑。深さは13cm。埋土は暗褐色土の単層。出土遺物は、土師器皿(35~40)、杯(41~47)、刀子(48)、鍋(49・50)など。SB03の内側に位置することや、出土遺物の組み合わせから、地鎮祭などの祭祀的な意味の強い埋納坑と考えられる。

SK32は第III地区中央に位置する。平面形は長軸125cm、短軸55cmの隅丸長方形で、深さ15cm。埋土は黄褐色土をブロック状に含む暗褐色土の単層。床面から土師器椀(54)が伏せられた形で出土。墓の可能性もある。また、埋土上位から有孔石板(149)が出土。

SK34は第III地区中央、SK32の東側に位置する直径140cmの円形の平面形をもつ土坑。深さは135cmを測り、埋土は4層。第I・II層より瓦質土器鍋片(68・69)をはじめ、すり鉢片等が出土、また第III・IV層より瓦質土器片、須恵器片、木片等が出土。底部では湧水がみられ、井戸の可能性もある。

(3) 溝・溝状遺構

第IV地区のみから18条の溝・溝状遺構を検出した。流路の方向をみると、南北方向から約20°のふれをもつSD01・09、ほぼ南北の向きをもつSD06・07・11、ほぼ東西方向のSD03、区画を形作るように東西方向から南北に流路を変えるSD06・07などがあり、それらは切り合い関係や出土遺物、および掘立柱建物の棟方向から、SD01・09は平安時代、その他は中世のものとして比定できる。また、SB17に沿うように検出されたSD08も建物と同時期中世と考えられる。いずれも上面の削平が激しく、埋土は単層。SD01からは緑釉陶器(55)、三叉トチン(59)、銅銭(151 図版11)が出土。

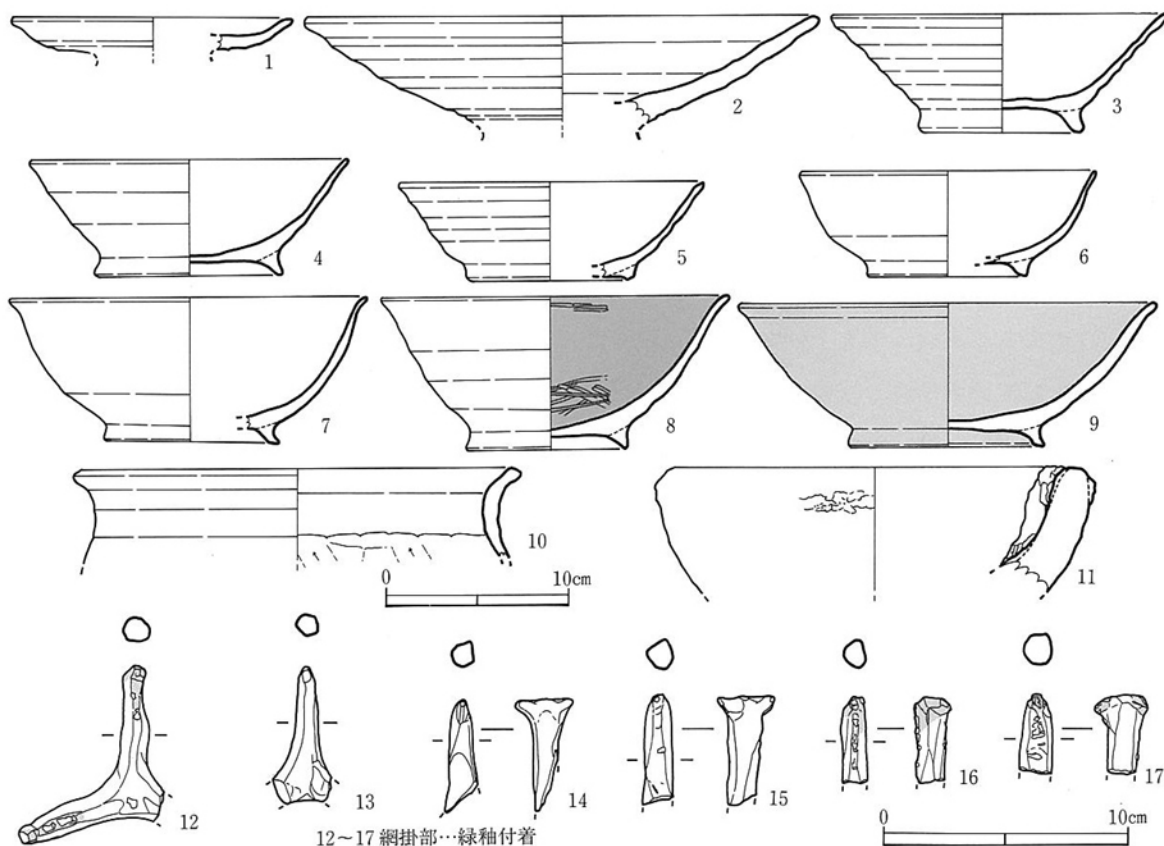
IV 遺 物

平成8年度の東禅寺・黒山遺跡の調査からは、平安時代中頃から15・16世紀にかけての土器を中心に、石器、鉄器などの遺物が出土した。これらの遺物は平成7年度の調査とほぼ同時期のものであるが、近世の遺物は出土しなかった。以下、遺構ごとに主たる遺物を取り上げる。

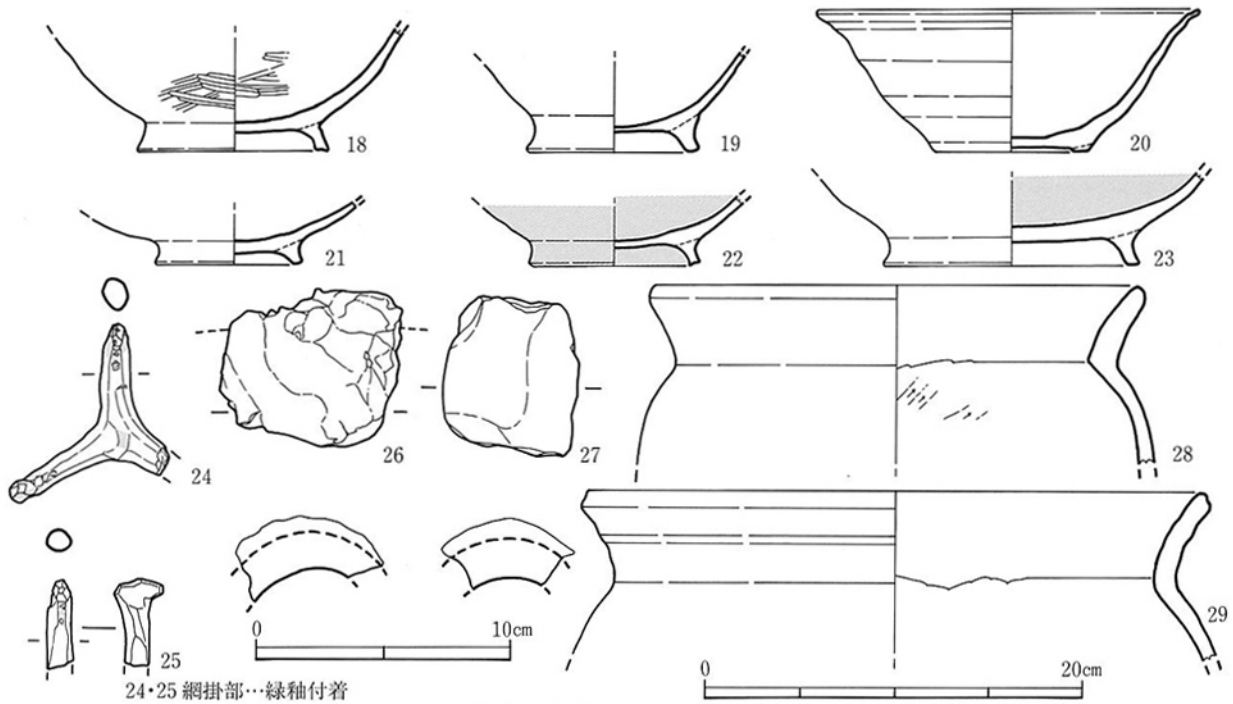
S K 08出土の遺物 (第10図 図版7) 1・2は土師器高台付皿。2の皿部は口径21cmと大きく深い。3～7は土師器椀。3は底部へら切り。4・5の体部は直線的にのび、6・7は内湾しながら立ち上がり、口縁は外に開く。いずれも底部糸切り後高台を貼る。8は黒色土器椀。内面はミガキ、黒く燻される。9は緑釉陶器椀。糸切り後、ハの字状に開く高台が付く。全面施釉。10は土師器甕。頸部は直立し口縁が外反する。11は埴塼。内面及び口縁部に黒褐色の溶銅が付着。12～17はトチン。12～14は三叉であるが、他は棒状の可能性もある。手捏ねで、断面はほぼ円形、端部は上下に扇形に広がる。12・16・17の端部には緑釉付着。他に、銅銭(150 図版11)が出土。「延喜通宝」か。

S K 07出土の遺物 (第11図 図版7) 18～21は土師器椀。糸切り後20を除き、断面台形の比較的高い高台を貼り付ける。18は内外面ともに丁寧なミガキ。20の体部はわずかに内湾しながらのび口縁は外反する。22・23は緑釉陶器椀。糸切り後高台を貼り付ける。22は全面施釉。23は内面にのみ釉が残る。24・25はトチン。端部には緑釉付着。26・27はフィゴ羽口。厚さ約1.5cmで外面に褐色の銅滓が付着。28・29は土師器甕。くの字状に曲がる口縁をもつ。

S K 20出土の遺物 (第12図 図版7) 30～33は須恵器杯。底部へら切りで、32・33には「ハ」字形に開いた低い高台を貼り付ける。10世紀中頃か。灰白色を呈し、焼成良好。34はフィゴ羽口。外面への付着物は認められず、未使用のものと思われる。



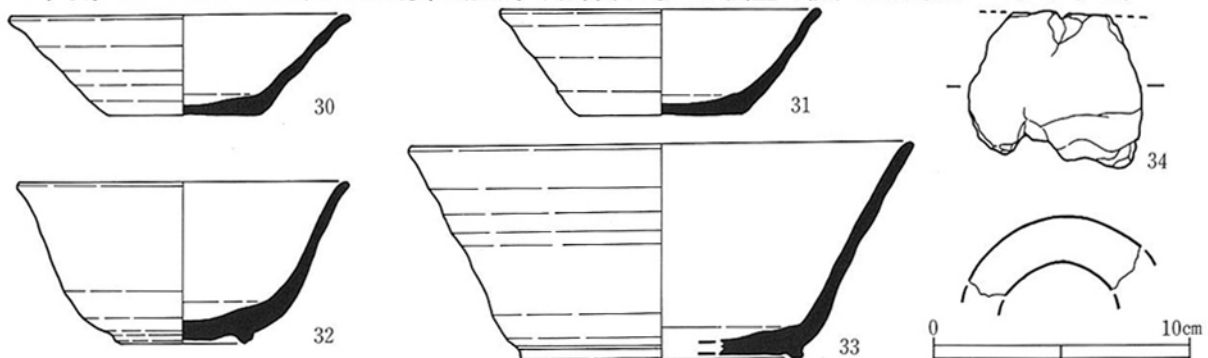
第10図 S K 08出土遺物実測図



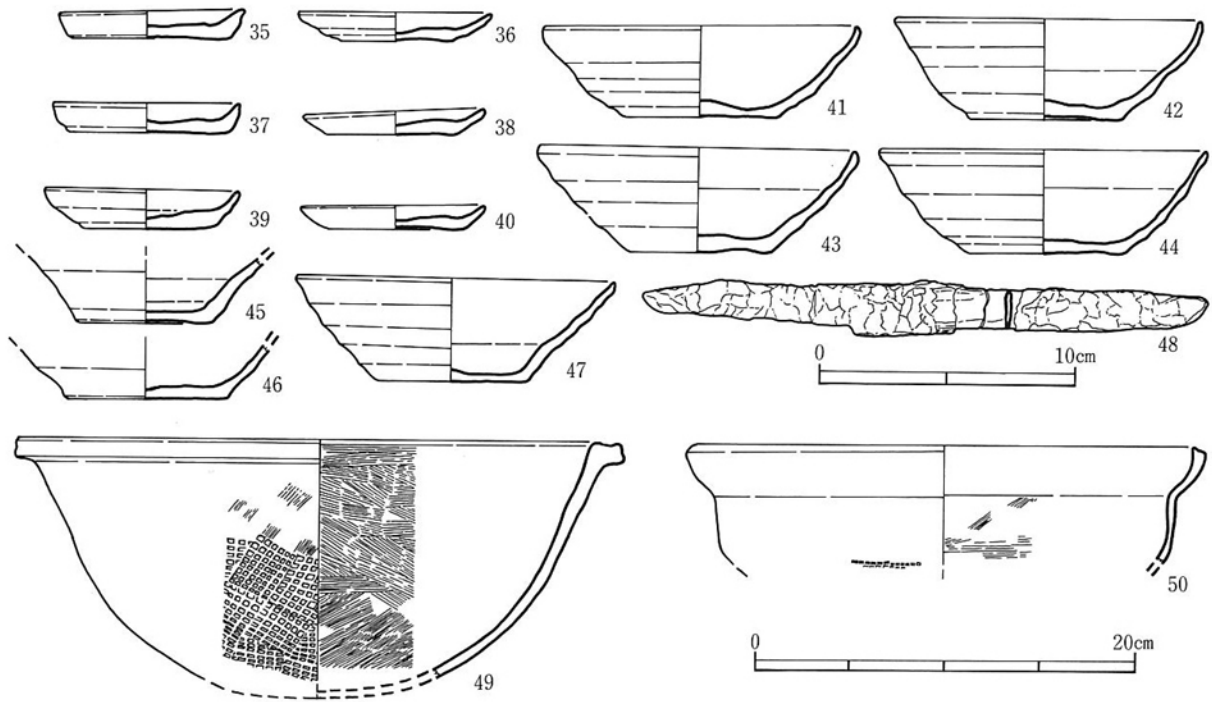
第11図 SK07出土遺物実測図

SK11出土の遺物(第13図 図版8) 35~40は土師器皿。口縁を斜め上方に短くつまみあげる。口径6.6~7.5cm、色調は黄橙色。41~47は土師器杯。糸切りの底部にわずかに内湾する体部が付く。口径11.8~12.8cm、器高3.6~4.2cm。色調は浅黄橙色。48は刀子。全長22.2cm、幅1.5cm。49は瓦質土器鍋。外面底部は格子叩き目、胴部はナデ調整だが、ハケメ痕が残る。内面ハケメ調整。50は土師器鍋。外面底部には叩き痕が残る。内面ハケメ調整。

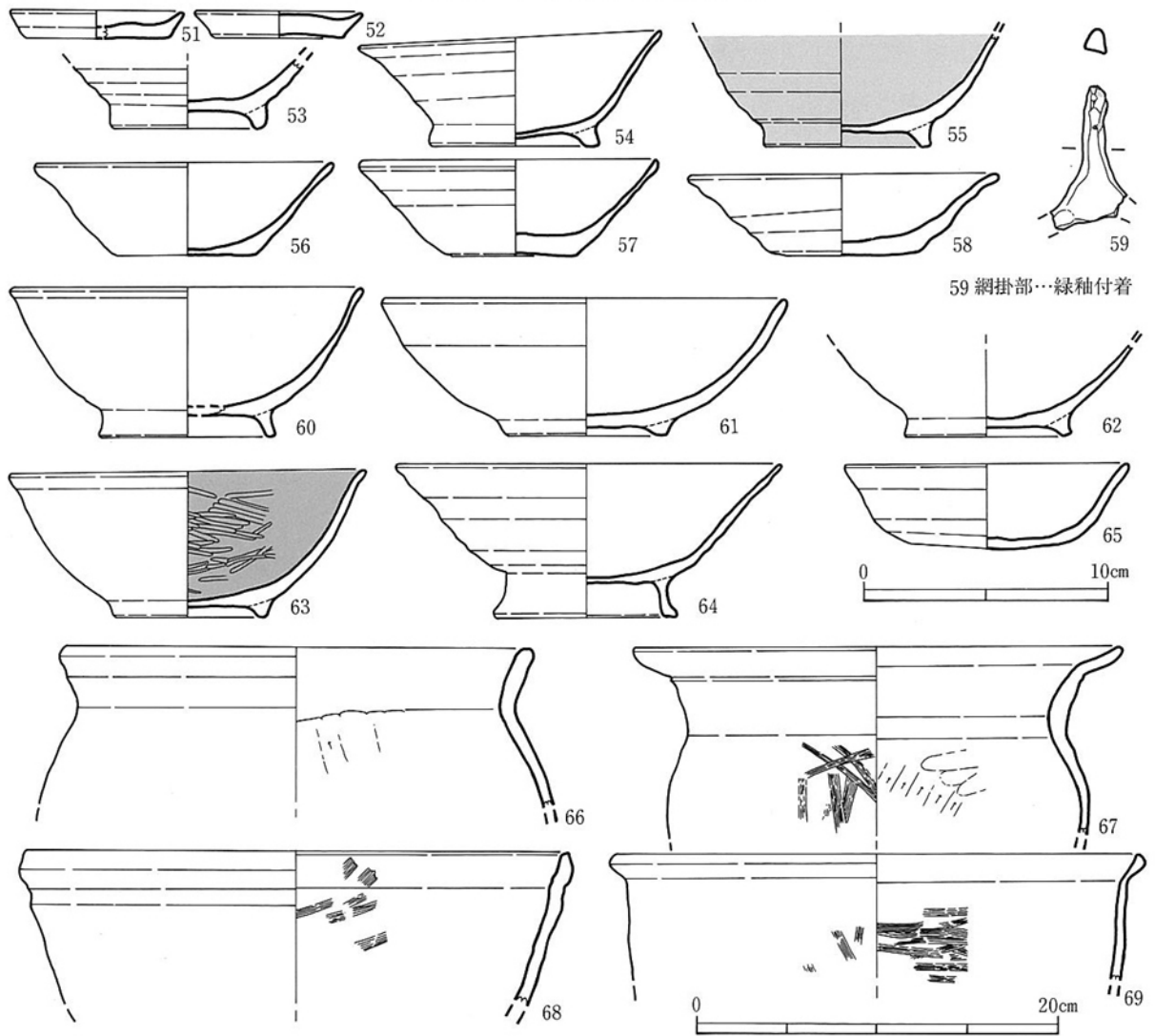
その他のSK・SD出土の遺物(第14図 図版8) 53・56・67はSK02出土。53は土師器椀。糸切り後高台を貼り付ける。56は土師器杯。糸切りの底部にはほぼ直線的にのびる体部が付く。67は土師器甕。頸部はゆるやかに外反し、口縁部はやや外に張り出し端部は丸くおわる。内面ヘラケズリ、外面はハケメ痕が残る。54はSK32出土の完形の土師器椀。灰白色を呈し、体部は直線的に立ち上がり、口縁はわずかに外反する。断面台形の高台を貼り付ける。55・59はSD01出土。55は緑釉陶器椀の底部(図版6)。全面施釉で外面には4条の沈線が巡る。59は三叉トチン。端部に緑釉付着。58はヘラ切り底をもつ土師器杯。体部は開き気味に立ち上がり口縁は外反する。62~66はSK04出土。63は黒色土器。内面は丁寧なミガキ調整。64は、底部切り離し後、比較的高い高台が付く土師器椀。ヘラ切りか。65は須恵器杯。底部ヘラ切りで緩やかに立ち上がる体部が続く。66は土師器甕。口縁は「く」の字状。68・69はSK34出土の瓦質土器鍋。内外面ともハケ調整の後、口縁部をヨコナデする。



第12図 SK20出土遺物実測図



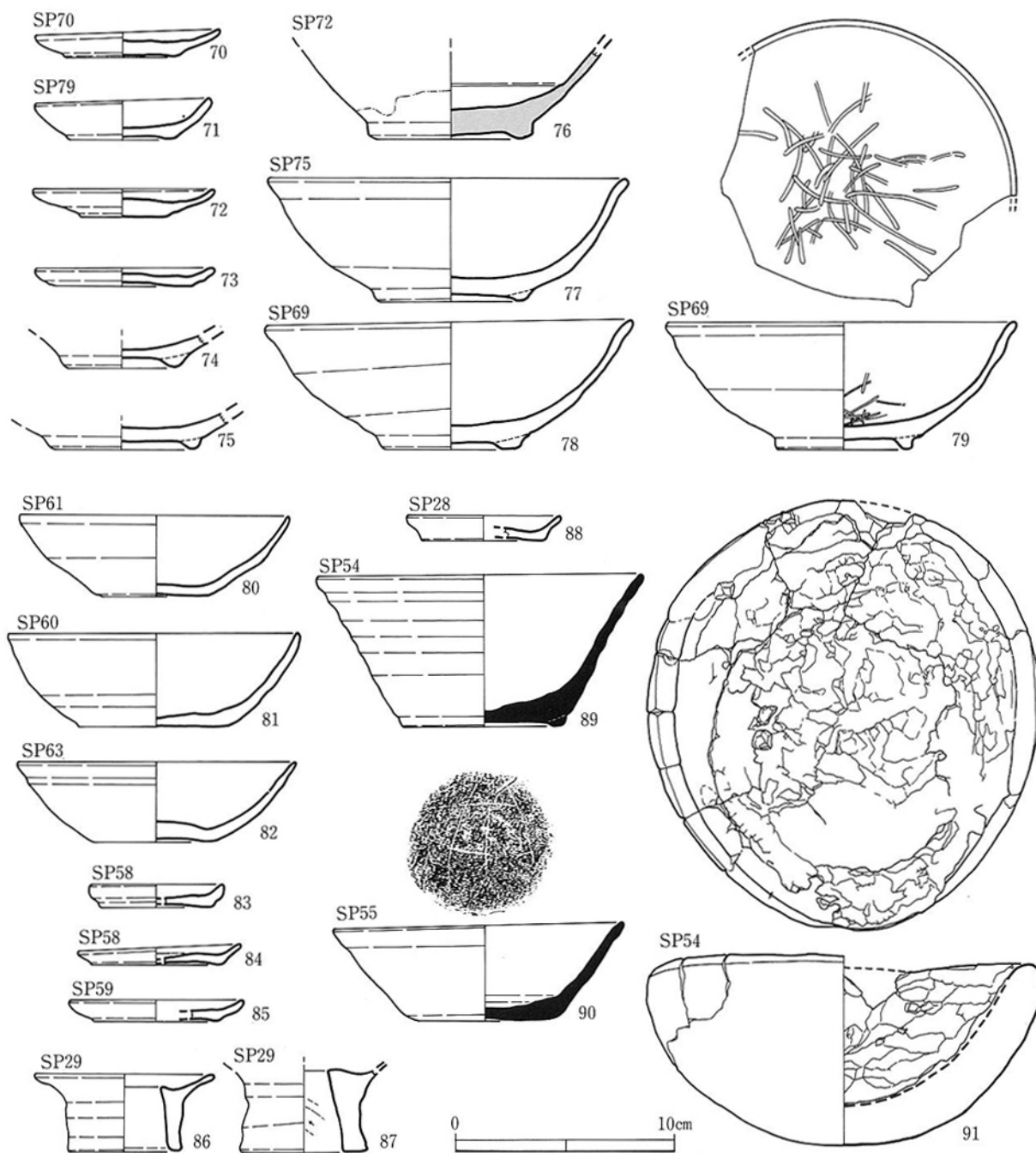
第13図 SK11出土遺物実測図



59 網掛部…緑袖付着

51・52 SK18 53・56・67 SK02
 54 SK32 55・59 SD01 57 SK19
 58 SK29 60 SK23 61 SK27
 62~66 SK04 68・69 SK34

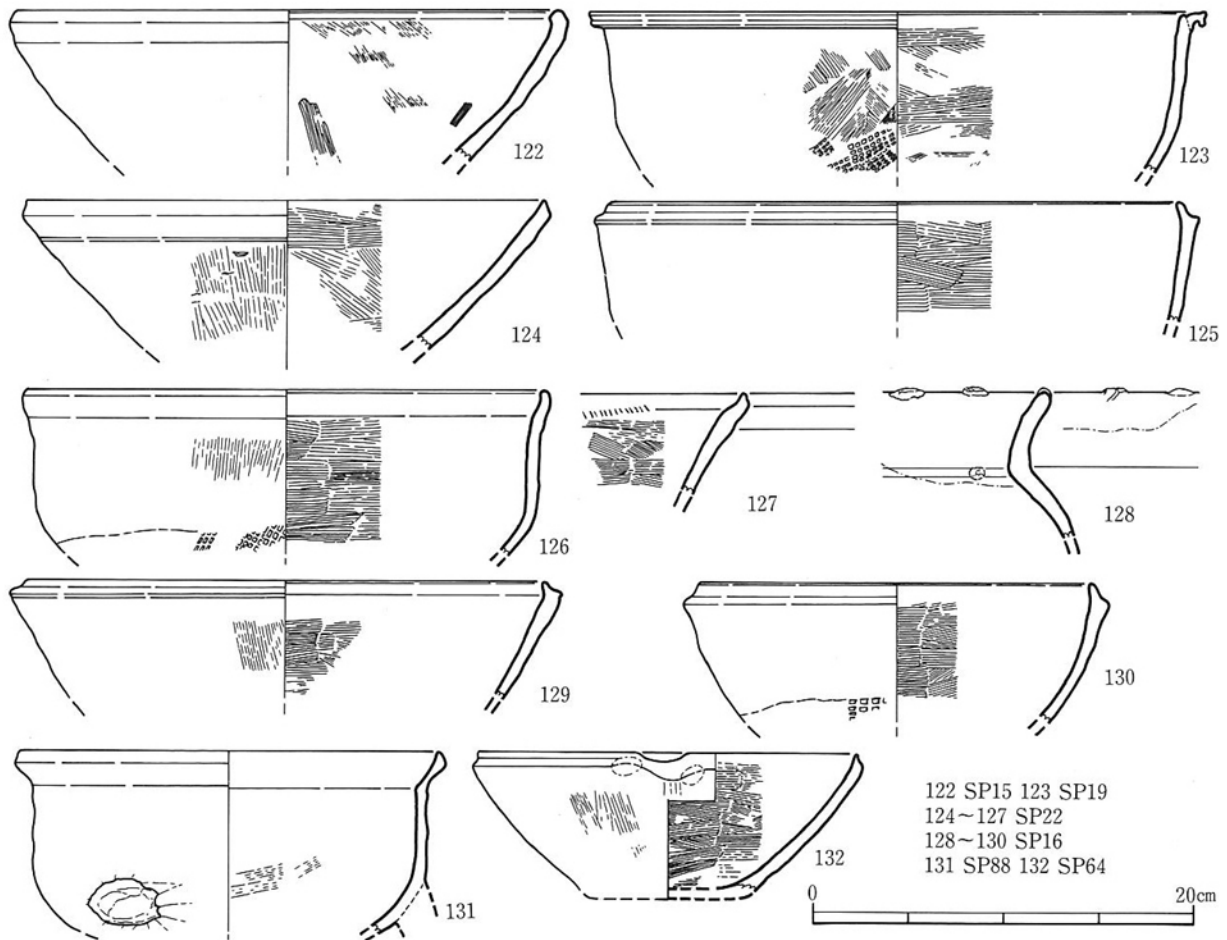
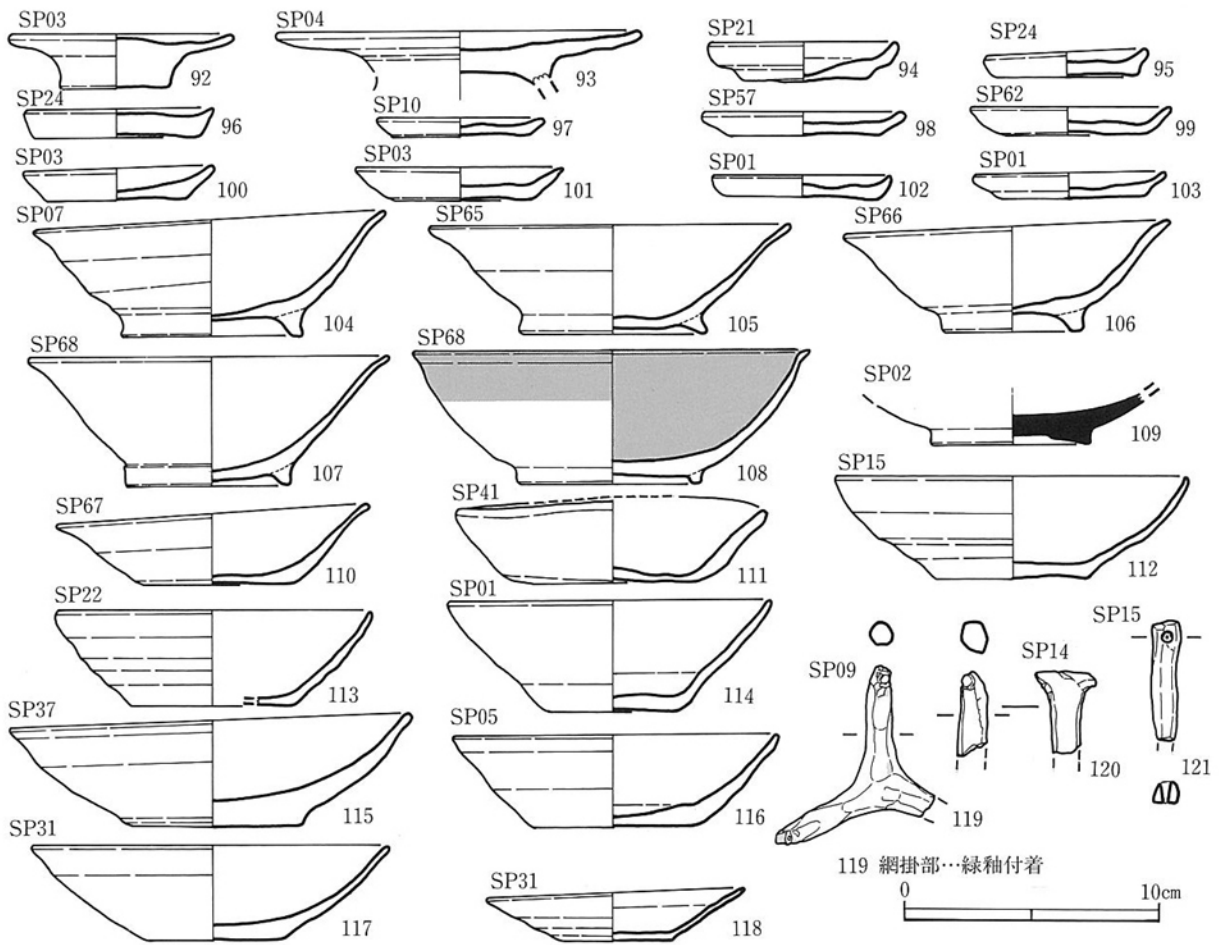
第14図 SK・SD出土遺物実測図



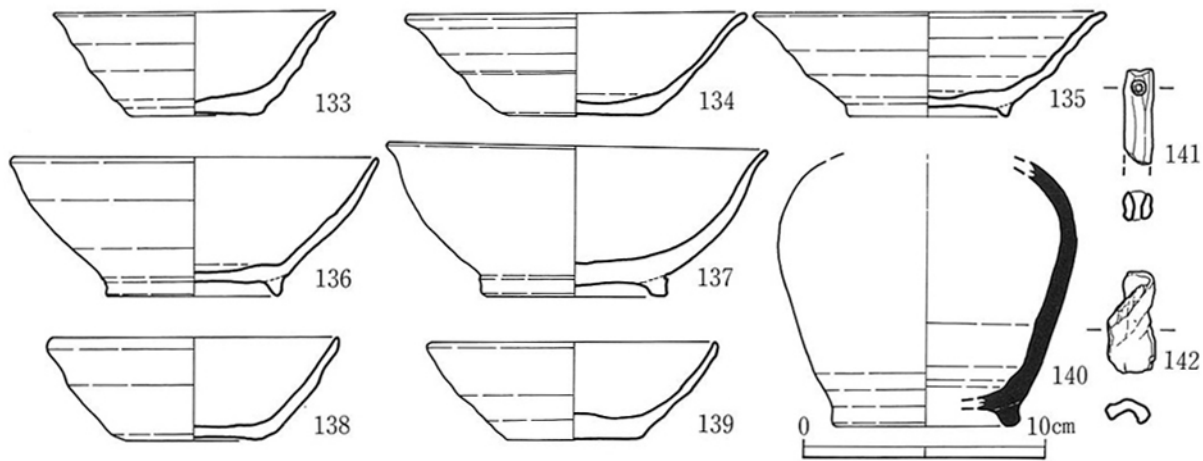
第15図 S P出土遺物実測図①

掘立柱建物を構成する柱穴出土の遺物（第15図 図版9） 70～79はS B16を構成する柱穴から出土（図版6）。70～73は土師器皿。底径は小さく、体部はまっすぐのびる。76は白磁碗。低い削り出し高台をもち、灰白色の釉を施す。77～79は土師器碗。78・79は底部糸切りの後、断面台形の高台を貼り付ける。体部は内湾し口縁はわずかに開く。80～82は土師器杯。底部糸切り、体部はわずかに内湾する。86・87は有孔台付皿。底部糸切りの後、刀子状の工具で穿孔する。88～91はS B06を構成する柱穴から出土（図版6）。89・90は須恵器杯。底部へら切りで、89は端にハの字状に開く高台を貼り付ける。体部はやや外反気味にのびる。90の底部には板目圧痕、底部内面にへら記号あり。91は埴埴。半球状で、周縁の一部を注口に適すように仕上げる。高さ8.6cm、口径17.8cm、厚さ2.1cm。内壁には黒色溶銅が付着し、木炭片も混じる。高熱を受けた器面は黄褐色を呈し亀裂を生じる。

その他の柱穴出土の遺物（第16図 図版10～11） 92は底部の厚さが1.3cmあり高台状になる土師



第16図 S P出土遺物実測図②

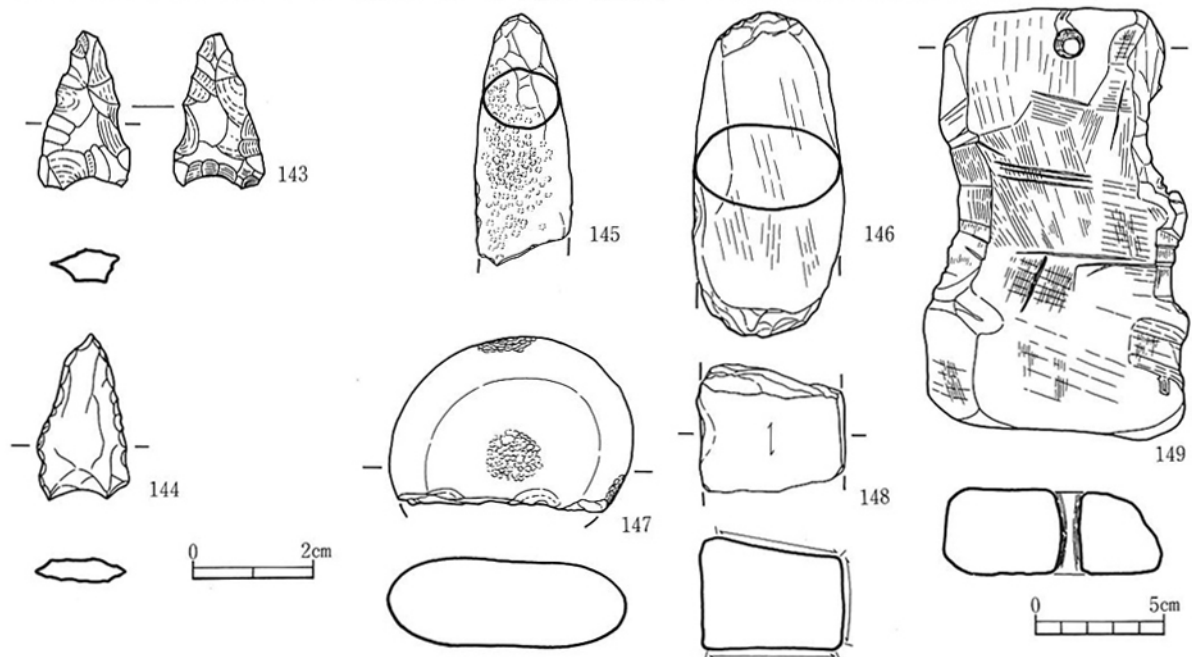


第17図 包含層出土遺物実測図

器皿。93は高台付皿。皿部は比較的平ら。108は黒色土器。109は釉は剥がれているが、須恵質の緑釉陶器。径6.2cmの削り出し高台で、中央には径3cmの削り込みがある。畿内からの搬入品とみられる。122はすり鉢。卸目はハケ状。123は鍋。内外面ともハケ調整。外面底部は叩き。124~127はS P 22出土の鍋。125の口縁部は真直に立ち上がり、口唇部は尖る。口縁部の下は鐳状に仕上げる。126は瓦質、他は土師質。128~130はS P 16出土。128は甕。口縁部に褐色の鈹滓附着。129は瓦質、130は土師質の鍋。口唇部は尖る。131は足鍋。土師質だが二次的に火を受けた可能性がある。132は瓦質土器こね鉢。

包含層出土の遺物 (第17図 図版20) 135~136は土師器椀。底部糸切りの後高台を貼り付ける。140は須恵器長頸壺。外底端部に「ハ」の字形を呈する高台が付く。141は双孔棒状土錘。142は鉛塊。板状のものをねじ切ったような破断面をもち、叩きつぶしたような痕跡を残す。

出土石器 (第18図 図版11) 143は黒曜石、144は安山岩製の石鏃。145は安山岩製の磨製石斧。基部を欠失。叩打痕あり。146は大型蛤刃石斧。刃部と基部を欠損。蛇文岩製。147は叩石。凝灰岩の円礫を使用。148は砥石。3面に使用の痕跡あり。凝灰岩製。149は有孔石板。一孔が短辺に近い中央部に位置する。表面は丁寧な削られるが、裏面は粗く平らに仕上げるにとどまる。滑石製か。



第18図 出土石器実測図

V まとめ

東禅寺・黒山遺跡の調査は平成7年度・8年度の2か年が経過した。調査総面積は約5,500㎡。掘立柱建物跡33棟、土坑93基、溝状遺構35条、柱穴約2,300個の遺構が発見され、多量の遺物が出土した。ここでは2年間の調査成果をまとめ、緑釉陶器、「周防鑄銭司」との関わりについて述べてみたい。

緑釉陶器 平成7年度調査では、SD-2から緑釉陶器が出土しており、今回の調査でも多くの遺構から緑釉陶器が出土した。特に、SK08・09からは三叉トチンも共伴している。三叉トチンは周防国府跡の調査においても出土している^{*1}が、素焼きの器に釉をかけ重ね焼きする際に間に挟んで使用された窯道具である。これが緑釉陶器とともに同一の遺構から数多く出土したことは、当地において緑釉陶器を焼成した窯の存在を示唆するものと推測できる。実際SK08は焼土を含み窯として用いられた可能性がなくもないが、平面形は長円形であり、緑釉陶器焼成窯として知られる小型三角窯^{*2}の平面形と異なる。今回明確な窯跡は確認されなかったものの、古代におけるこの地は、「周防鑄銭司」の近くに位置し、釉薬の原料である黒鉛(金属鉛)、緑青、白石(石英)などを容易に入手し得ること、鑄銭司の西側に隣接する陶地区で窯業が営まれていたこと、また陸上・海上の交通の要衝であったことなど、緑釉焼成窯立地の条件が整っていたと考えられる。今後周辺部の調査に期待されるところが大きく、延喜式の中の「長門瓷器」の生産地及び流通等についての手がかりとなり得よう。

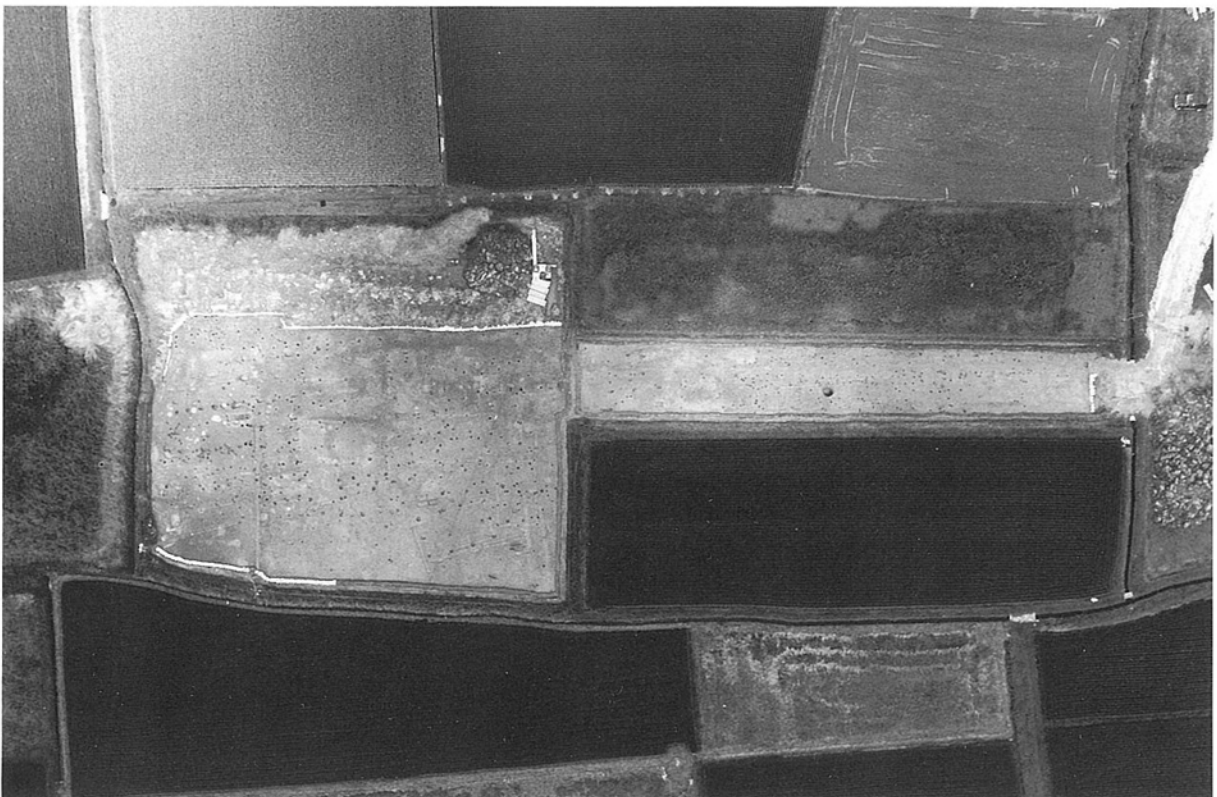
「周防鑄銭司」との関わり 東禅寺・黒山遺跡で人々の生活が開始され始めたのは平安時代。復元された同時代の掘立柱建物5棟の中で、SB06の柱穴内からは埴塼が出土した。これは法量的にも、形態的にも「周防鑄銭司」出土のものと酷似している。鑄造関連の遺構は確認できていないものの、銅銭、フイゴ羽口、埴塼、銅滓などが、また、今年度の調査では包含層からではあるが鉛塊も出土しており、鑄銭に携わる集団の生活する集落という性格が強い。おそらく集落は「周防鑄銭司」開設に従い営まれ始めたと考えられる。さらに、当遺跡の東側に位置する上辻遺跡でもフイゴ羽口が出土しており^{*3}、集落は「周防鑄銭司」の隆盛とともに拡大していった。そしてその衰退とともに集落も命運を同じくしたものとみられる。やがて近世初めの水田開発に伴い集落は姿を消していく。

最後に、春日神社(山口市陶糸根)拝殿の絵馬「国司総社参拝及鑄銭司古図」についてふれておく。これは周防鑄銭司が稼働していた当時の様子を伝えるものとされ^{*4}、古図に記されている「銅座」や「鍛冶屋」「鑄銭坊」「銭庫」「司(地)家」等の地名は現在も字名として残っている。それらの地名や春日神社及び河川の位置関係から察するに、東禅寺・黒山遺跡の位置する字大円の地はその絵図の中であり、つけ加えるならば、「政所」のあった場所と遠くないと考えられる。天明年間(1781~1789)に書かれた「鑄銭司物語」^{*5}の「政所」の章の中に「大殿は是より政所へしるへをよと宣ひけるまにまに岡村の家はなれて、大室の方を見渡し給へば…」とあり、金毛川の左岸、岡から大室にかけて「政所」のあったことをうかがわせる。推測の域は出ないが、今後の調査に期待するものである。

注 *1 防府市教育委員会『防府市文化財調査年報II・IV・VI』1979 1981 1984。*2 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター『篠窯跡群』1984。*3 山口県教育委員会『上辻・大歳・今宿西』1984。*4 『鑄貨図録』(佐野英山 1913)の中にも古図が描かれているが、若干表現に違いがある。しかし、地名などの位置関係はほぼ同一である。*5 内田 伸『鑄銭司物語』1964。「政所」とは鑄銭司長官の屋敷。



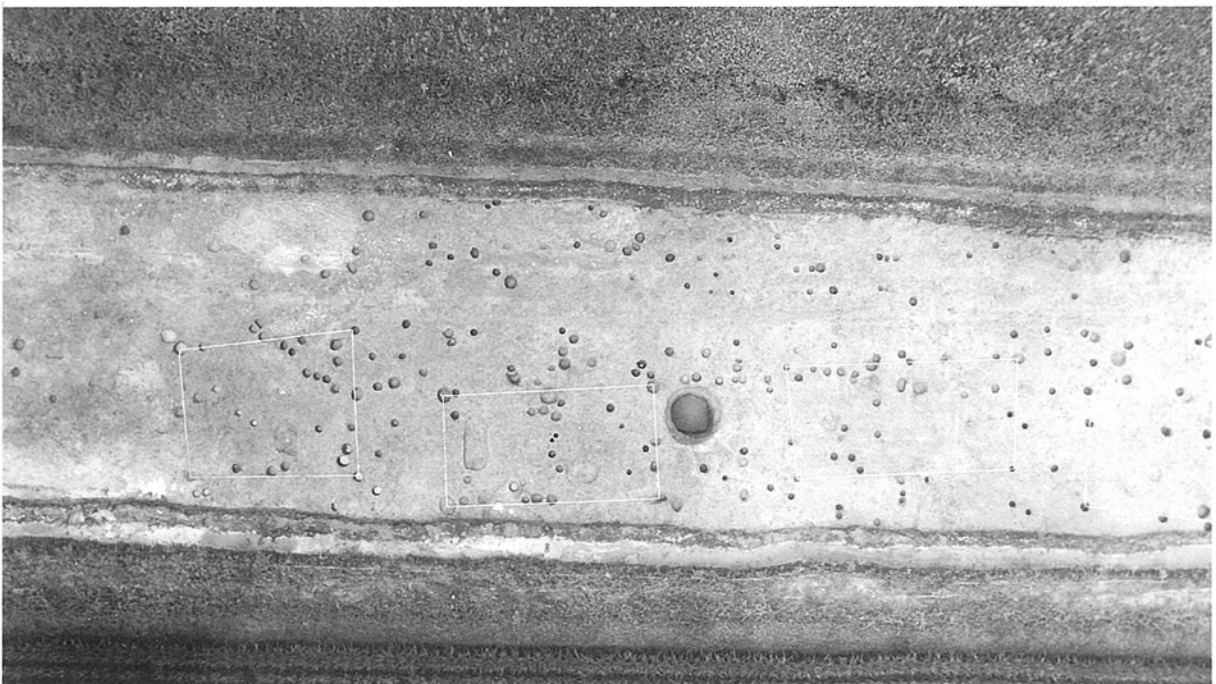
東から東禅寺・黒山遺跡を望む



調査区全景



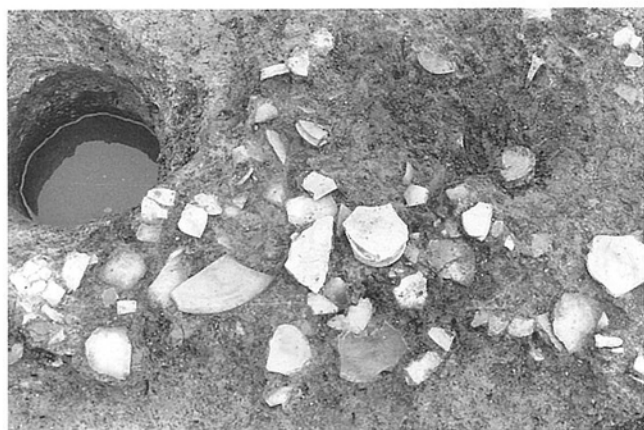
第IV地区北西区 (南から)



第III地区中央部 (南から)



S K08土器出土状況①



土器出土状況②



土器出土状況③



銭出土状況



完掘

図版 4



S K07土器出土状況①



土器出土状況②



石出土状況



土器出土状況③



完掘



S K02土器出土状况



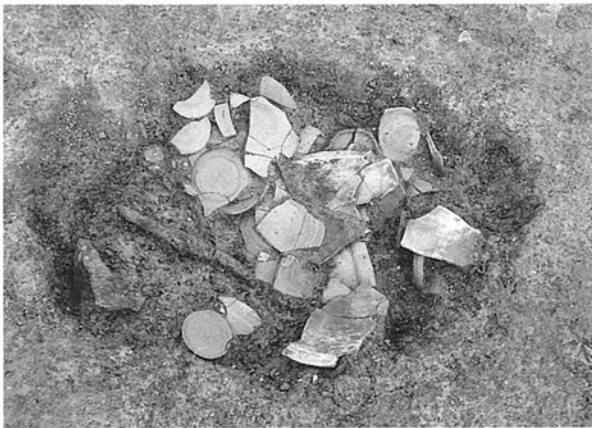
S K03完掘



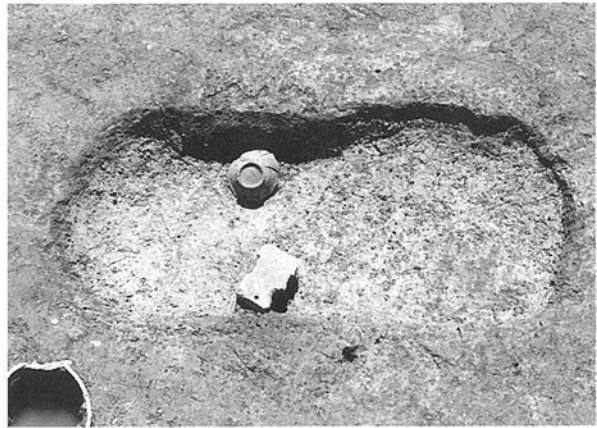
S K04土器出土状况



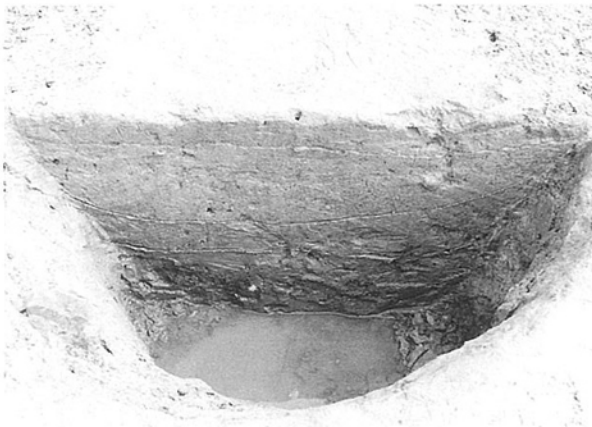
S K20土器出土状况



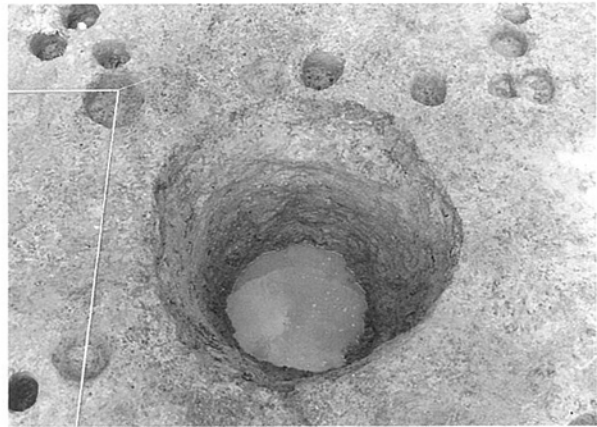
S K11土器出土状况



S K32土器・石製品出土状况



S K34土层断面



S K34完掘

図版6



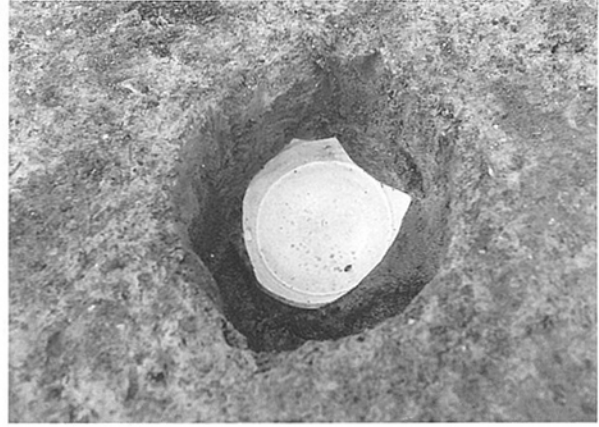
S P54埴埜出土状況



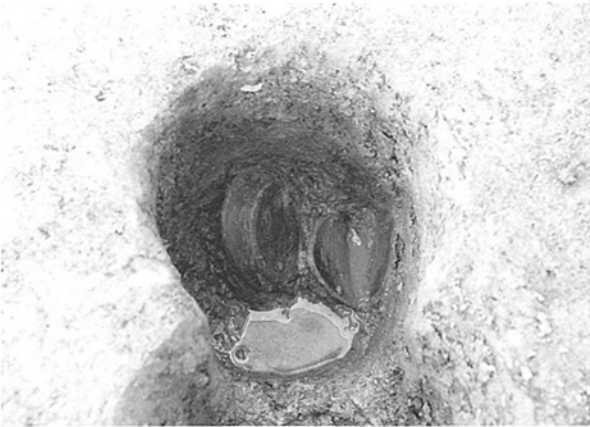
S P55土器出土状況



S P79土器出土状況



S P72白磁出土状況



S P75土器出土状況



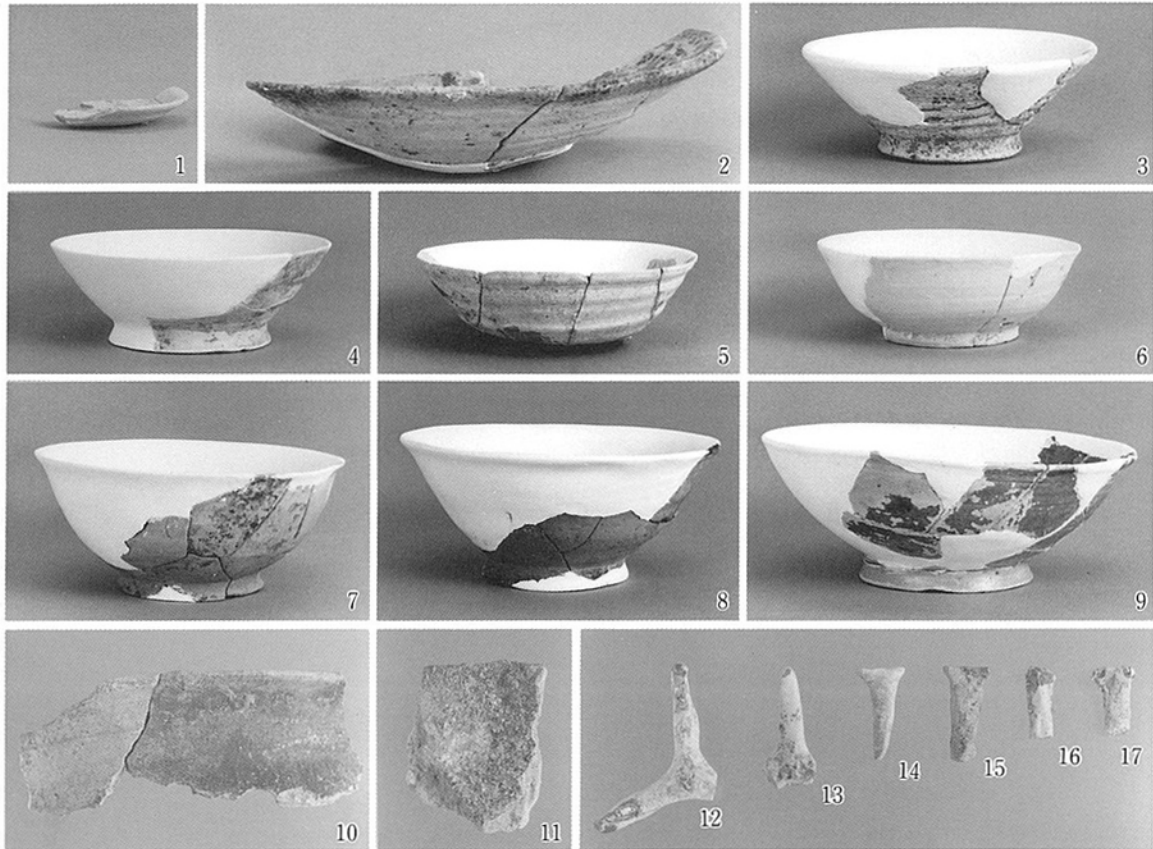
S P37土器出土状況



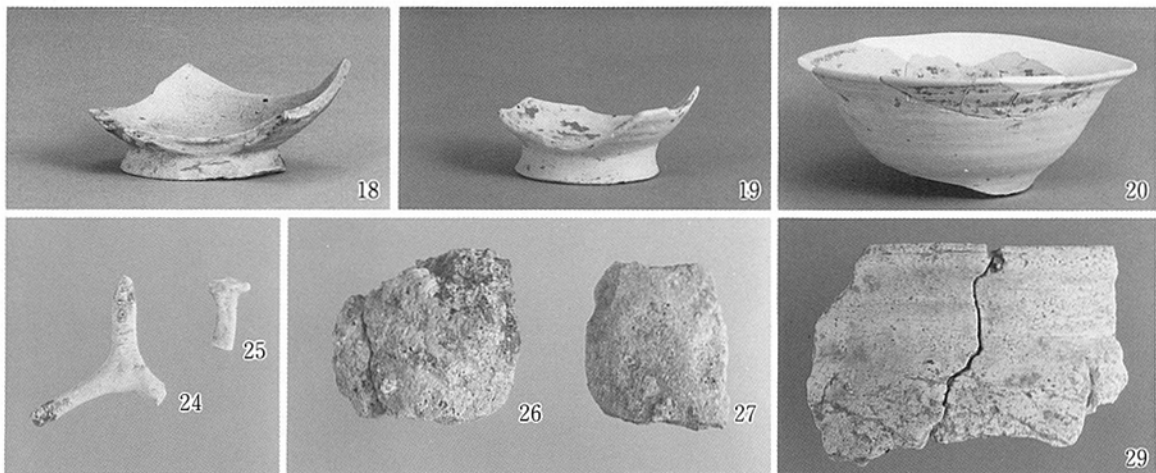
S P05土器出土状況



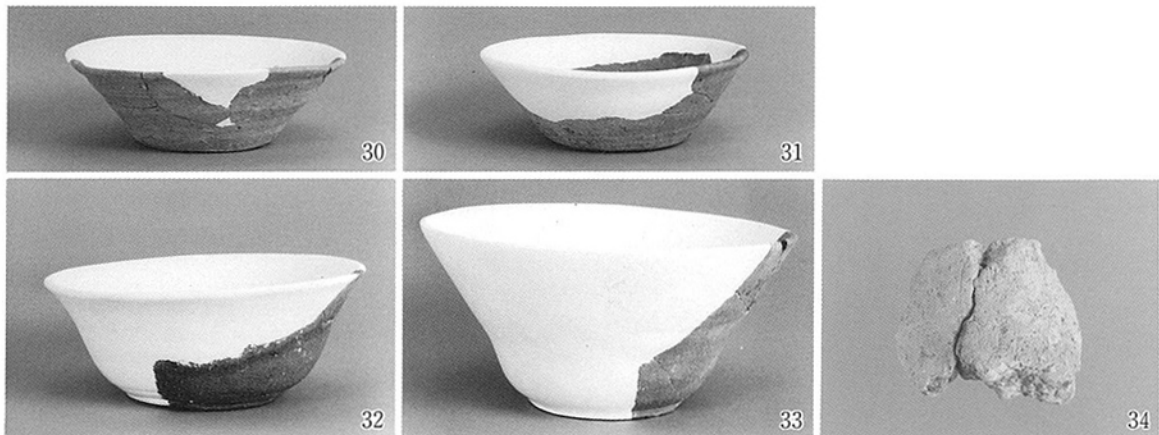
S D01緑釉陶器出土状況



S K08出土遺物

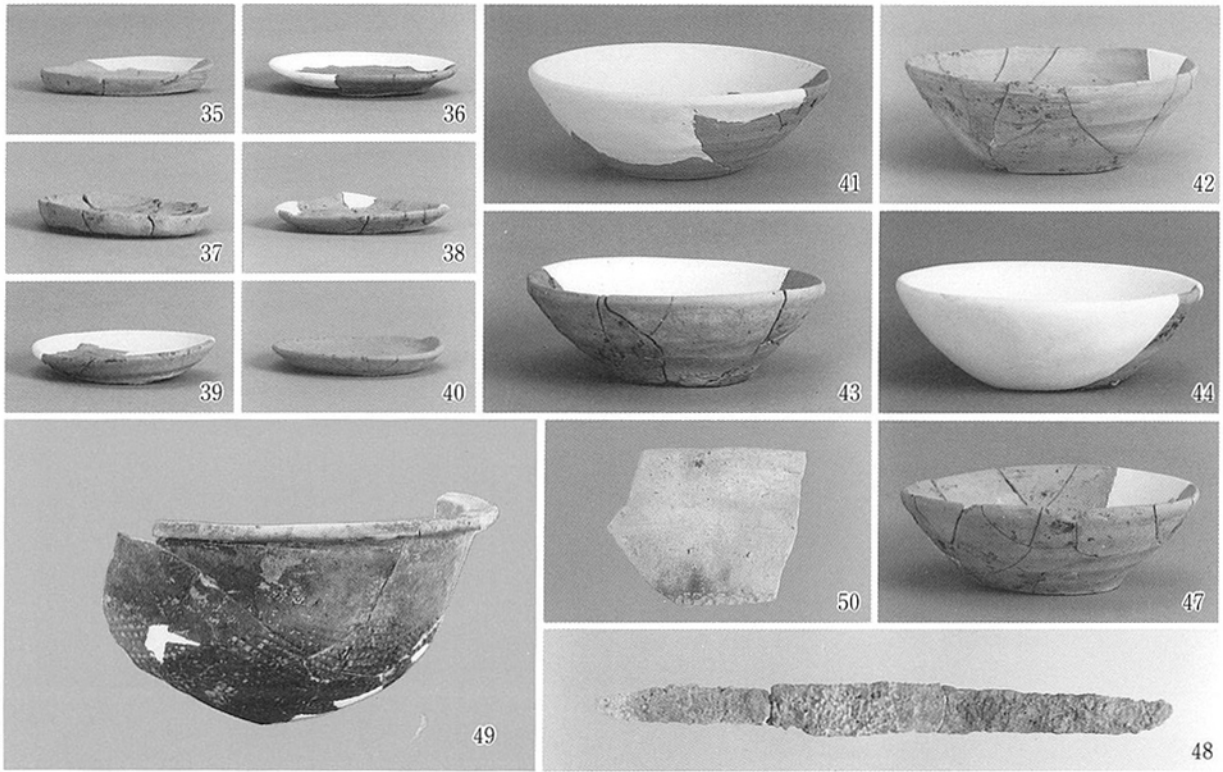


S K07出土遺物



S K20出土遺物

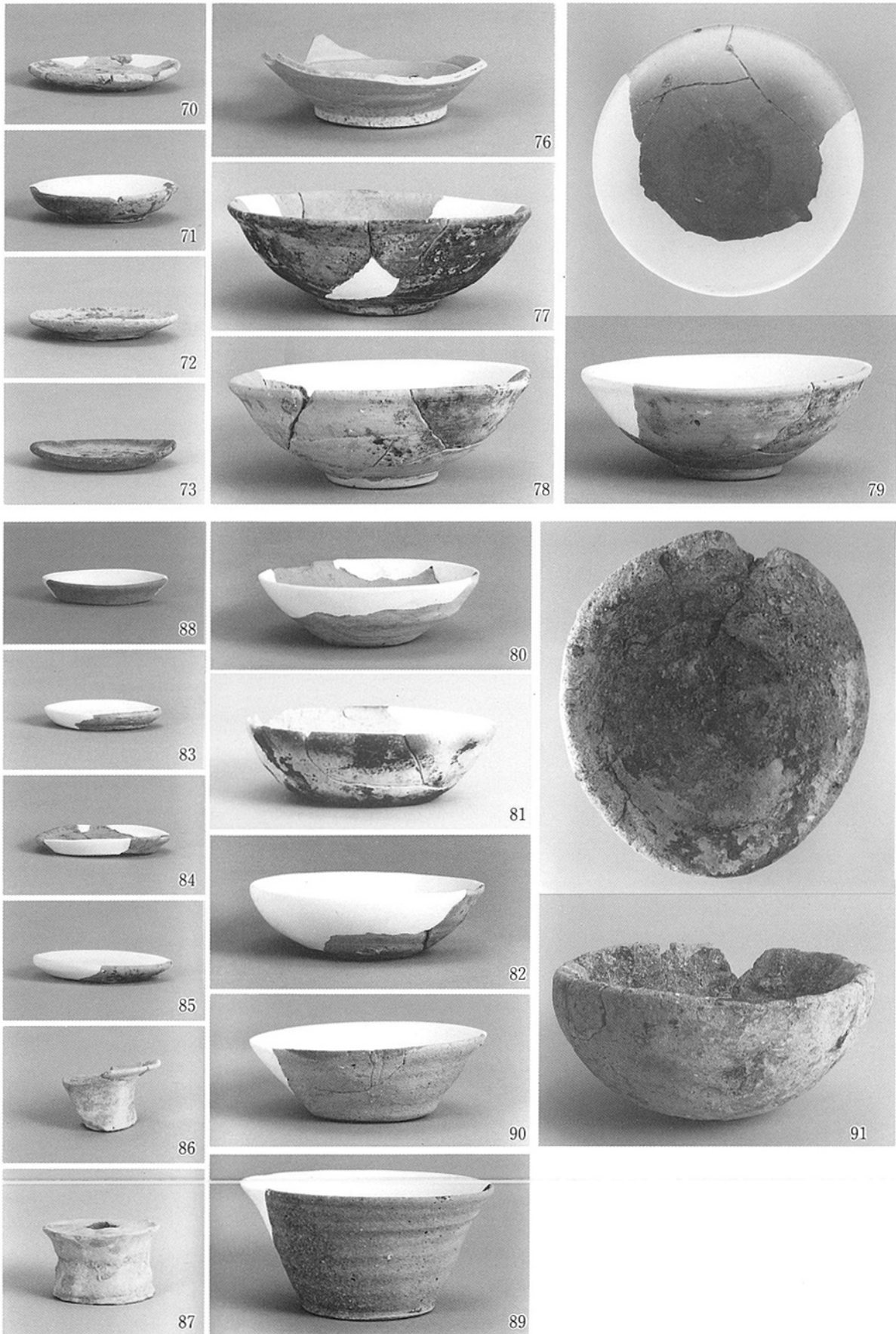
図版8



SK11出土遺物

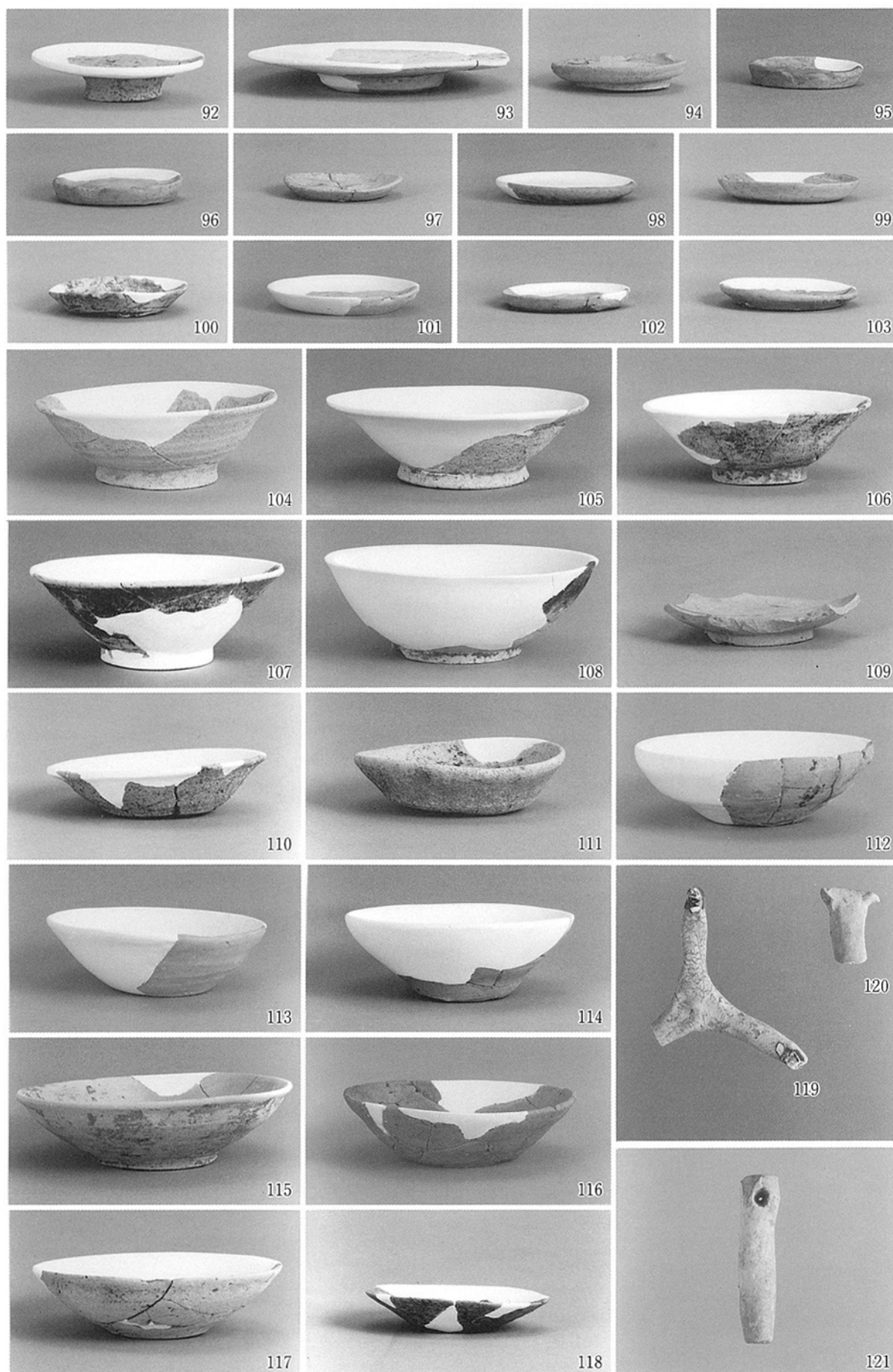


SK出土遺物

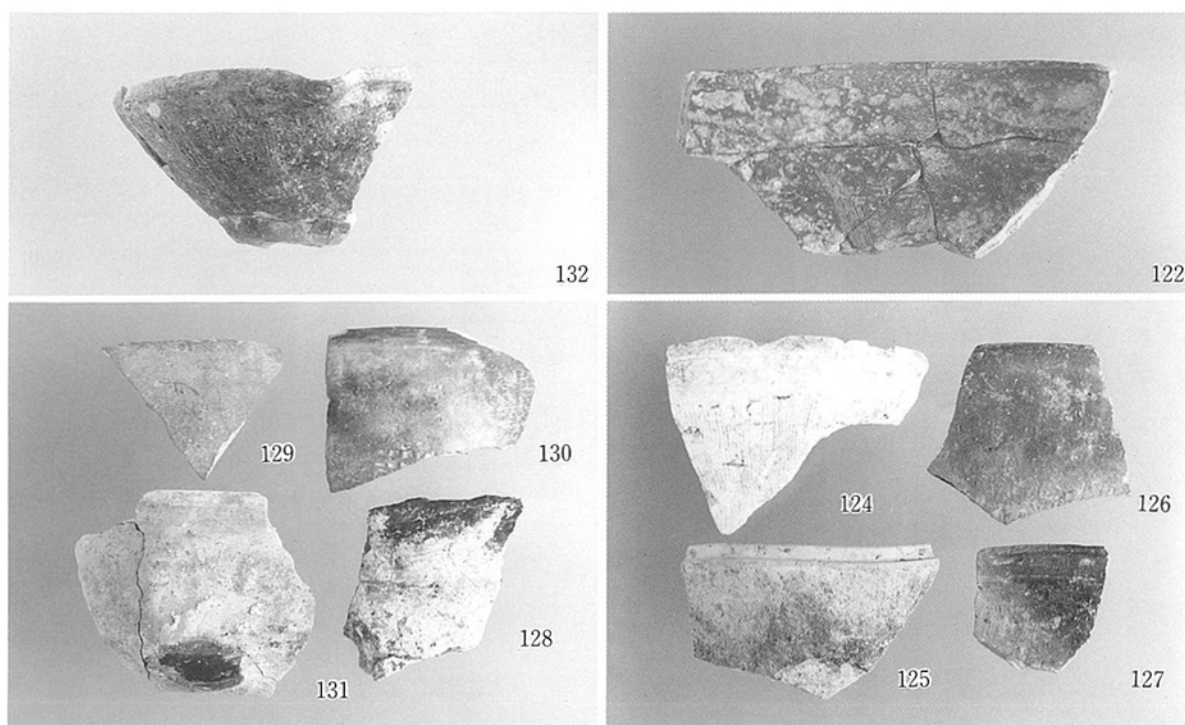


SP出土遺物①

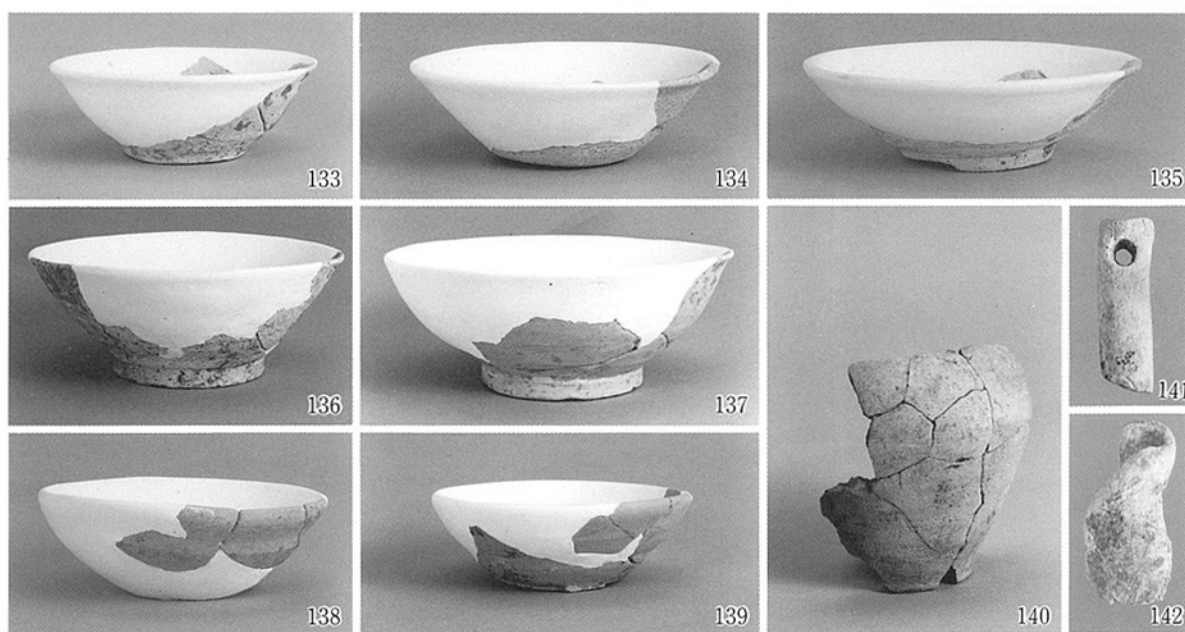
図版10



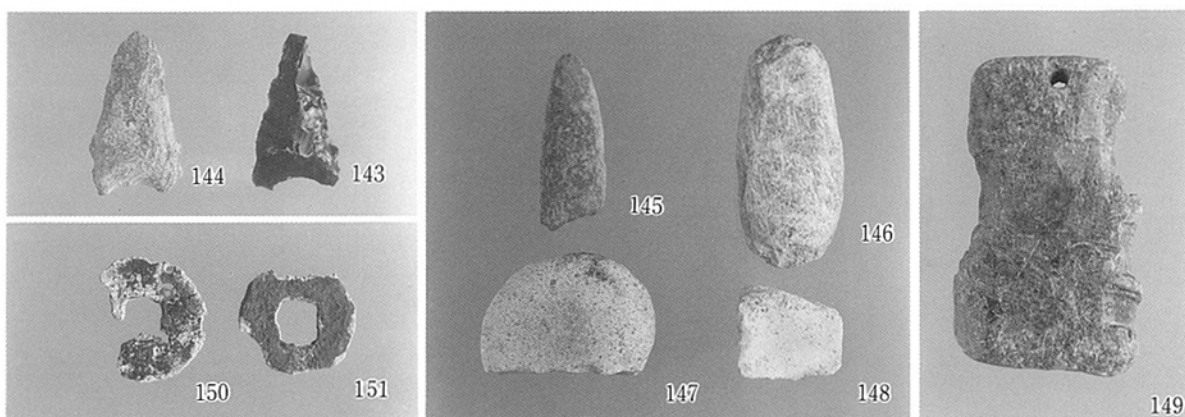
SP 出土遺物②



S P 出土遺物③



包含層出土遺物



出土石器・銭

150 SK08出土
151 SD01出土

報告書抄録

ふりがな	とうぜんじ・くろやまいせき
書名	東禅寺・黒山遺跡II
副書名	平成8年度南若川治水緑地建設事業に伴う発掘調査報告
巻次	
シリーズ名	山口県教育財団埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	第3集
編著者名	大石 学 山本義信
編集機関	財団法人山口県教育財団
所在地	〒753 山口県山口市大手町2130 TEL 0839-23-1060 (山口県埋蔵文化財センター)
発行年月日	西暦1997年3月19日 (平成9年3月19日)

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
とうぜんじ 東禅寺・ くろやまいせき 黒山遺跡II	やまぐちけんやまぐちし 山口県山口市 おおあぎすぜんじ 大字鑄銭司 あぎおおえん 字大円	35203		34° 4' 36"	131° 27' 4"	19960513 } 19960911	2,140	南若川治水緑地建設事業に伴う事前調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
東禅寺・ 黒山遺跡II	集落跡	平安～中世	掘立柱建物跡 23棟 柱穴 1,171個 土坑 36基 溝状遺構 18条	緑釉陶器、黒色土器、 土師器、須恵器、 磁器、三叉トチン、 埴埴、銭、石器	緑釉陶器・三叉トチン が廃棄された形で出土 した土坑2基は、近辺 に緑細焼成の窯跡のあ る可能性を示唆する。

山口県教育財団埋蔵文化財調査報告 第3集

東禅寺・黒山遺跡II

—平成8年度南若川治水緑地事業に伴う発掘調査報告—

1997年3月

編集 財団法人 山口県教育財団

(山口市大手町2130)

発行 財団法人 山口県教育財団

(山口県大手町2130)

印刷 児玉印刷株式会社

(宇部市明神町3丁目4-3)